# 第4章　大陸・国家に対するイメージ
## ー認知的・情意的側面と象徴要素からー

本章の目的は、高校生がもつ世界における複数の大陸・国家に対するイメージについて、認知的側面と情意的側面の関係からその全体像を明らかにし、さらに、各大陸・国家のイメージの主要な内容について考察することである。ただし、本章では、その大陸・国家に対するイメージを、地理学の内田(1986,1987)[1)]の「場所イメージ」を参考とし「高校生が世界における複数の大陸・国家に対して思い描く心的内容のすべて」と規定しておきたい。

## 第1節　研究の方法と手順

心理学の水島(1989)[2)]は、認知(知)的イメージを準対外的な知覚的なものと内的で思考的なものとし、情意(感情)的イメージを内的で感情や欲求の象徴的表現のものと説明している。また、地理教育では陸川(1998)[3)]が、中学生の大陸・国家に対するイメージ分析の際に、認知的イメージを感覚・知覚・学習・思考に関するイメージとし、情意的イメージを感情・情緒・価値に関するイメージとして定義づけている。

本研究では、以上のような認知的側面と情意的側面の内容を参考にしながらも、複雑・多様に捉えられるイメージを、その認知的側面と情意的側面の本質から明確に区別しながら考察していくことは困難であると判断した。そこで、本研究では、その両側面の意味に近づけられると考えられた、言語の品詞の性質を利用して、以下のように、認知的・情意的イメージを規定しておく。

すなわち、認知的イメージについては、客観的な画像などの知覚的なものや思考しやすいものに対するイメージとした上で、「ある一組の名詞と形容詞とによって連想されるイメージ」とする。例えば、被験者は、「国土が大きい⇔国土が小さい」の場合に、面積の客観的な数値による大小を連想するであろう。その際に、画像的な知覚からその大小を捉えたり、あるいは既存の認識にある数値自体から「A国の面積の2倍がB国の面積である」などの思考によって、国土の大きさについてのイメージを描く。他に、「工業が盛んな⇔工業が盛んでない」の場合に、重工業か軽工業か、出荷額か出荷量かなどの詳細な内容を、既存の認識から連想し、その客観的な数量について思考した上で、工業の状況についてのイメージを描く。

一方、情意的イメージについては、より主観的な感情、評価、欲求などの象徴的表現となるイ

メージとした上で、「ある一組の形容語（形容詞、もしくは動詞＋形容詞）によって連想されるイメージ」とする（例：明るい⇔暗い、もしくは親しみやすい⇔親しみにくい）。つまり、被験者は、任意に連想する多様な名詞を含む語句を、その中の「形容語」に対応させながら連想することになる。例えば、被験者は、感情や評価の象徴となる「明るい⇔暗い」の場合に、「（その国の）人々の気質が」、「経済状況が」などの名詞を含む語句を任意に対応させてイメージを描く。他に、評価や欲求の象徴となる「豊かな⇔貧しい」の場合に、「人々の暮らしが」、「その国の財政が」などを対応させたり、無意識に複数の任意の名詞を含む語句を混ぜ合わせながら対応させてイメージを描く。

本研究では、以上のような認知的・情意的イメージに対し、まず、多くの大陸・国家に対するイメージについての大量なデータを一括処理してみることができる、オズグッド(Osgood,C.E.)が開発した評定尺度法調査と因子分析から成るSD(semantic differential)法を採用し、分析を行う。次に、各大陸・国家のイメージの主要な内容をみるために、調査対象に対して自由に連想する語句を調べることによって、被験者の自発性や重要性からみることのできる自由連想法調査(岩下, 1983)[4)]を行う。

以上の2つの方法による分析の手順は、次の（1）～（7）とする。

（1） 評定尺度法調査によって得られるデータは、大陸・国家（対象）、評定尺度、被験者の3つの相からなる。評定尺度は、前述したように、対の意味を持つペアである（下の例示のために「A⇔B」と表記しておく）。そして、このペアの間に、一方の極から他方の極に向かって7つの段階を設定する（「A」←「まったく(7)」←「かなり(6)」←「少し(5)」←「どちらともいえない(4)」→「少し(3)」→「かなり(2)」→「まったく(1)」→「B」）。つまり、被験者は、この7つの段階から思い描く内容の度合いを番号で選択することになる。例えば、C国を、評定尺度「面積の大きい⇔面積の小さい」から評定する際に、被験者が、C国－「面積の大きい」－「かなり」と思い描けば、段階(6)を選択することになり、あるいはC国－「面積の小さい」－「まったく」と思い描けば、段階(1)を選択することになる。

（2）このようにして得られる回答値に対して、各大陸・国家における各評定尺度の被験者平均を算出する。

（3）その認知的・情意的イメージごとのデータに基づき、大陸・国家のイメージの特徴を把握する。続いて、そのデータに因子分析を行い、認知的・情意的イメージの基本的な次元を導出し、考察する。

（4）認知的・情意的イメージにおける各因子の負荷量に相関分析を行い、認知的イメージと情意

的イメージとの相関について考察する。

(5)以上の分析・考察結果をまとめ、認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像について明らかにする。

(6)次に、自由連想法調査を行い、先の評定尺度法調査と同様の大陸・国家に対して、被験者が自由に連想する語句を書き出させる。

(7)これによって得られた記述データから、出現率[5]の高い語句を、象徴要素[6]として摘出する。そして、その象徴要素を検討・考察することによって、各大陸・国家のイメージの主要な内容について考察する。

## 第2節　調査の方法と実施

従来、SD法を採用する研究では、被験者集団の違いによって分析結果が左右されることから、伊藤(1994)[7]も、等質性の高い被験者集団を選んでいる。そこで、本研究でも、①同じ学区に居住している、②年齢が等しく同一のライフ・ステージにある、③日本で生まれ海外旅行経験がなく、間接情報だけでイメージが形成されている、④ほぼ同様に基礎学力が充実しているの4点から、等質性の高い被験者となる新潟県内S高等学校の2年生 135 人から得られたデータを採用した。

さて、評定尺度法調査を実際に行う場合、被験者の回答項目数を適正な規模にするよう求められる。なぜならば、その規模があまりにも大きい場合、回答に多くの時間を要し、被験者に精神的負担を強いるため、データの信頼性が低下するからである。そこで、本研究で採用したデータは、そのような回答量の適正規模を念頭におき、以下のように、大陸・国家や評定尺度の選定を図り、調査を実施して得られたものである。

評定尺度法調査を行う場合、被験者がその大陸・国家に対して、ある程度必要なイメージを持ち得ていることが前提となる。このため、大陸・国家の選定は、中等地理教育の学習内容でよくみられ、被験者が比較的にイメージを有しているものの中から、空間的に偏らないように工夫し、選定した(第8表)[8]。

同様に、評定尺度の選定においても、認知的イメージの場合は、予備調査[9]により被験者が多くのイメージを有しているマスメディアや中等地理教育の学習内容における空間[10]、自然、社会、経済、文化、政治に関する主要な項目を取り上げ、類似した項目とならないように工夫し、選

定した。また、情意的イメージの場合は、予備調査において出現率の高かったものと[11]、本研究が大陸・国家を問題としていることから、心理学の従来のSD法による国家・都市に関係するイメージ研究においてより頻繁に用いられているもの[12]の中から選定した(第9表)。

第8表　評定対象となる大陸・国家

| 番号 | 大陸 | 番号 | 国家 | 大陸の小区分 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | アジア | 7 | 韓国 | 東アジア |
| | | 8 | 中国 | 東アジア |
| | | 9 | タイ | 東南アジア |
| | | 10 | インド | 南アジア |
| | | 11 | サウジアラビア | 西アジア |
| 2 | アフリカ | 12 | エジプト | 北アフリカ |
| | | 13 | ケニア | 東アフリカ |
| | | 14 | 南アフリカ | 南アフリカ |
| 3 | ヨーロッパ | 15 | イギリス | 西ヨーロッパ |
| | | 16 | スウェーデン | 北ヨーロッパ |
| | | 17 | ポーランド | 東ヨーロッパ |
| 4 | アングロアメリカ | 18 | アメリカ | |
| 5 | ラテンアメリカ | 19 | ブラジル | |
| 6 | オセアニア | 20 | オーストラリア | |
| | | 21 | ロシア | |

## 第9表　評定尺度の項目

| | 番号 | 項目（7段階評定尺度）<br>評定の度合い「左辺7－中間4－右辺1」 | 簡略名称 | 主な対応内容 |
|---|---|---|---|---|
| 認知的イメージ | ① | 日本から遠い－日本から近い | 「距離」 | 空間 |
| | ② | 国土が広い－国土が狭い | 「国土」 | 空間 |
| | ③ | 人口が多い－人口が少ない | 「人口」 | 社会・政治 |
| | ④ | 自然条件が良い－自然条件が悪い | 「自然」 | 自然 |
| | ⑤ | 民族が多い－民族が少ない | 「民族」 | 文化・政治 |
| | ⑥ | 工業が盛んである－工業が盛んでない | 「工業」 | 経済 |
| | ⑦ | 農業が盛んである－農業が盛んでない | 「農業」 | 経済 |
| | ⑧ | 資源が豊かである－資源が豊かでない | 「資源」 | 経済 |
| | ⑨ | 貿易が盛んである－貿易が盛んでない | 「貿易」 | 経済 |
| | ⑩ | 独自の文化がある－独自の文化がない | 「文化」 | 文化 |
| | ⑪ | 犯罪が多い－犯罪が少ない | 「犯罪」 | 社会・政治 |
| | ⑫ | 軍事力がある－軍事力がない | 「軍事」 | 政治 |

| | 番号 | 項目（7段階評定尺度）<br>評定レベル「同左」 | 簡略名称 | 文献頻度 | 予備調査 |
|---|---|---|---|---|---|
| 情意的イメージ | ① | 危険な－安全な | 「危安」 | 0 | ☆ |
| | ② | 安定な－不安定な | 「安不」 | 4 | ☆ |
| | ③ | 好き－嫌い | 「好嫌」 | 8 | |
| | ④ | 暗い－明るい | 「暗明」 | 13 | ☆ |
| | ⑤ | 豊かな－貧しい | 「豊貧」 | 4 | ☆ |
| | ⑥ | 住みにくい－住みやすい | 「住難易」 | 0 | ☆ |
| | ⑦ | 積極的な－消極的な | 「積消」 | 16 | |
| | ⑧ | 親しみやすい－親しみにくい | 「親易難」 | 6 | |
| | ⑨ | 静かな－賑やかな | 「静賑」 | 13 | ☆ |
| | ⑩ | 美しい－汚い | 「美汚」 | 7 | ☆ |
| | ⑪ | 弱い－強い | 「弱強」 | 7 | |
| | ⑫ | 重い－軽い | 「重軽」 | 3 | ☆ |

文献頻度項目は過去のSD法を用いた「社会・環境」に関する論文の中で用いられた評定尺度の頻度数を意味する（井上・小林, 1985）。
予備調査項目は予備調査において出現率20%以上の評定尺度を☆で表記した。
評定尺度の簡略名称は以後の第10表、第11表、第12表、第13表で使用する。

以上から、被験者の負担を考慮し、対象となる大陸・国家の総数を 21 、評定尺度の総数を 24（認知的 12 、情意的 12 ）、総回答数が 504 になる評定尺度法調査を計画した。さらに被験者の負担を考慮し、調査は、回答数 252 ずつの認知的イメージと情意的イメージの2つに分けて実施した[13)]。その結果、各被験者が全回答を終了したことから、信頼性の高いデータが得られたと判断できた。有効データは、120（男子 62 名、女子 58 名）であった。

続く、自由連想法調査は、先の評定尺度法調査の被験者のうちの 118 名（男子 60・女子 58 ）を被験者とし、同様の大陸・国家に対して連想する語句を自由に3つ記述させた[14)]。なお、調査は、先の評定尺度法調査での評定尺度の記憶の影響を回避するために、調査時期にやや期間をおいて実施した[15)]。その結果、回答者全員の有効回答 118 が得られた。その得られたデータは、類似の語句を一括した上で出現率を求め、それが 10 %以上となった語句を、被験者の多くが持つ共通のイメージ、すなわち象徴要素として捉えることにした。

## 第3節　認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像

### 1　評定尺度調査によるイメージの概要

認知的イメージの概要は第10表のようになる。主要な要因がみられる評定尺度は以下のようになっている。

①「日本から遠い－日本から近い」は、南アフリカ、スウェーデン（の評定値）が高く、韓国、中国、アジア、タイ、ロシアが低い。とくにロシアは日本の隣国でありながら、やや遠い「距離」の評価がなされている。この理由には、ロシアの中心がヨーロッパロシアと捉えられていることが考えられる。また、ここでの標準偏差は、他と比べて最も大きい数値となり、この評定尺度での大陸・国家に関係する既存の認識はやや充実していることが考えられる。

③「人口が多い－人口が少ない」は、アジアとアメリカが高く、ポーランド、スウェーデン、オセアニア、ケニアが低い。ここでの評価には、アジアの人口問題や国土の大きさなどの認識が反映されたと考えられる。

# 第 10 表　認知的イメージの評価とその評定平均値

| | ①距離 | ②国土 | ③人口 | ④自然 | ⑤民族 | ⑥工業 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| m | 4.640 | 4.729 | 4.760 | 4.254 | 4.517 | 4.366 |
| s | 1.530 | 1.417 | 0.984 | 0.643 | 0.948 | 1.140 |
| 評価度合いが高い「A」 | 南アフリカ<br>スウェーデン | ロシア<br>アメリカ<br>中国<br>アジア | 中国<br>アジア<br>アメリカ<br>インド | オーストラリア<br>オセアニア<br>スウェーデン | アジア<br>アフリカ<br>中国 | アメリカ<br>アングロアメリカ<br>イギリス<br>ヨーロッパ |
| 「B」 | ポーランド<br>イギリス<br>ケニア<br>ブラジル<br>ラテンアメリカ<br>エジプト<br>アフリカ<br>ヨーロッパ<br>サウジアラビア<br>オーストラリア<br>オセアニア | アフリカ<br>オーストラリア<br>ブラジル<br>アングロアメリカ<br>ラテンアメリカ<br>ヨーロッパ | ブラジル<br>アフリカ<br>ラテンアメリカ<br>アングロアメリカ<br>ロシア<br>ヨーロッパ | ヨーロッパ<br>ラテンアメリカ<br>ポーランド<br>アジア<br>ブラジル<br>アングロアメリカ<br>アメリカ<br>イギリス<br>中国 | ラテンアメリカ<br>アメリカ<br>ブラジル<br>アングロアメリカ<br>ロシア<br>インド<br>南アフリカ<br>ケニア | 韓国<br>ロシア<br>アジア<br>中国<br>オーストラリア |
| 「C」 | アングロアメリカ<br>アメリカ<br>インド<br>ロシア | オセアニア<br>インド<br>サウジアラビア<br>エジプト<br>スウェーデン<br>南アフリカ<br>ケニア | タイ<br>イギリス<br>韓国<br>南アフリカ<br>サウジアラビア<br>オーストラリア<br>エジプト | タイ<br>南アフリカ<br>アフリカ<br>インド<br>ロシア<br>ケニア | サウジアラビア<br>ヨーロッパ<br>エジプト<br>オセアニア<br>オーストラリア<br>タイ | スウェーデン<br>ブラジル<br>ラテンアメリカ<br>ポーランド<br>オセアニア<br>サウジアラビア<br>南アフリカ<br>インド |
| 「D」評価度合いが低い | タイ<br>アジア<br>中国<br>韓国 | イギリス<br>ポーランド<br>タイ<br>韓国 | ケニア<br>オセアニア<br>スウェーデン<br>ポーランド | 韓国<br>サウジアラビア<br>エジプト | ポーランド<br>イギリス<br>スウェーデン<br>韓国 | タイ<br>エジプト<br>アフリカ<br>ケニア |

| | ⑦農業 | ⑧資源 | ⑨貿易 | ⑩文化 | ⑪犯罪 | ⑫軍事 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| m | 4.685 | 4.985 | 4.923 | 4.876 | 4.515 | 4.180 |
| s | 0.909 | 0.874 | 0.984 | 0.572 | 0.881 | 1.178 |
| 評価度合いが高い「A」 | アジア<br>タイ<br>中国<br>アメリカ | サウジアラビア<br>アメリカ<br>ロシア | アメリカ<br>アングロアメリカ<br>イギリス<br>ヨーロッパ<br>オーストラリア | 中国<br>アジア<br>インド<br>アフリカ<br>エジプト | アメリカ<br>アングロアメリカ | アメリカ<br>ロシア<br>アングロアメリカ<br>ヨーロッパ |
| 「B」 | インド<br>アングロアメリカ<br>ブラジル<br>ラテンアメリカ<br>オーストラリア<br>アフリカ | オーストラリア<br>中国<br>アングロアメリカ<br>ブラジル<br>ラテンアメリカ<br>アフリカ<br>南アフリカ<br>オセアニア | サウジアラビア<br>アジア<br>ブラジル<br>ラテンアメリカ<br>オセアニア<br>韓国 | 韓国<br>サウジアラビア<br>タイ | ロシア<br>ラテンアメリカ<br>ブラジル<br>アジア<br>ヨーロッパ<br>イギリス<br>インド<br>南アフリカ | イギリス<br>中国<br>ラテンアメリカ<br>サウジアラビア |
| 「C」 | オセアニア<br>ヨーロッパ<br>ケニア<br>ロシア<br>韓国<br>ポーランド<br>南アフリカ<br>スウェーデン | アジア<br>ヨーロッパ<br>エジプト<br>イギリス<br>スウェーデン<br>インド<br>ケニア | ロシア<br>中国<br>スウェーデン<br>ポーランド<br>アフリカ<br>タイ<br>南アフリカ | ラテンアメリカ<br>ブラジル<br>ケニア<br>ロシア<br>ヨーロッパ<br>イギリス<br>南アフリカ<br>オセアニア<br>ポーランド<br>アングロアメリカ | 中国<br>タイ<br>アフリカ<br>サウジアラビア<br>オセアニア<br>オーストラリア<br>ポーランド<br>韓国<br>エジプト | アジア<br>韓国<br>ブラジル<br>ポーランド<br>オーストラリア<br>スウェーデン<br>オセアニア<br>南アフリカ<br>エジプト<br>アフリカ |
| 「D」評価度合いが低い | エジプト<br>イギリス<br>サウジアラビア | ポーランド<br>タイ<br>韓国 | エジプト<br>インド<br>ケニア | アメリカ<br>スウェーデン<br>オーストラリア | ケニア<br>スウェーデン | インド<br>タイ<br>ケニア |

m：平均値　s：標準偏差値　「A」≧(m＋s)　m≦「B」＜(m＋s)　(m－s)≦「C」＜m　「D」＜(m－s)

# 第 11 表　情意的イメージの評価とその評定平均値

| | ①危安 | ②安不 | ③好嫌 | ④暗明 | ⑤豊貧 | ⑥住難易 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| m | 4.408 | 4.056 | 4.183 | 3.932 | 4.170 | 4.137 |
| s | 0.832 | 0.773 | 0.870 | 0.708 | 1.137 | 0.686 |
| 評価度合いが高い<br>「A」 | アメリカ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ロシア | イギリス<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>ヨーロッパ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>オセアニア<br>ヨーロッパ<br>イギリス<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ | ロシア<br>南アフリカ<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ | アメリカ<br>イギリス<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ヨーロッパ | ロシア<br>ケニア<br>インド<br>エジプト<br>南アフリカ<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>アフリカ |
| 「B」 | ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>ブラジル<br>インド<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>アジア<br>南アフリカ | アメリカ<br>オセアニア<br>ポーランド<br>韓国 | アメリカ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ポーランド<br>アジア<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>ブラジル | 中国<br>インド<br>ケニア<br>エジプト<br>アフリカ<br>アジア<br>韓国<br>タイ | ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>オセアニア<br>ポーランド<br>韓国 | タイ<br>中国<br>アジア<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ |
| 「C」 | 中国<br>アフリカ<br>ヨーロッパ<br>タイ<br>エジプト<br>ケニア<br>イギリス<br>韓国 | アジア<br>中国<br>ブラジル<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>エジプト<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>タイ<br>南アフリカ<br>ケニア | 中国<br>エジプト<br>韓国<br>アフリカ<br>インド<br>タイ | ポーランド<br>オセアニア<br>ヨーロッパ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ | ブラジル<br>中国<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>アジア<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>エジプト<br>南アフリカ<br>タイ<br>ロシア | ブラジル<br>韓国<br>アメリカ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ポーランド |
| 「D」<br>評価度合いが低い | オセアニア<br>ポーランド<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ | アフリカ<br>インド<br>ロシア | ケニア<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>南アフリカ<br>ロシア | イギリス<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>アメリカ<br>ブラジル | アフリカ<br>インド<br>ケニア | オセアニア<br>ヨーロッパ<br>イギリス<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ |

| | ⑦積消 | ⑧親易難 | ⑨静賑 | ⑩美汚 | ⑪弱強 | ⑫重軽 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| m | 4.208 | 4.058 | 3.877 | 4.023 | 3.968 | 4.123 |
| s | 0.888 | 0.772 | 0.657 | 0.900 | 0.716 | 0.531 |
| 評価度合いが高い<br>「A」 | アメリカ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ヨーロッパ<br>イギリス | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>アメリカ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>アジア<br>ヨーロッパ | ロシア<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>エジプト | ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>ヨーロッパ<br>イギリス<br>オセアニア<br>ポーランド | タイ<br>ケニア<br>アフリカ<br>インド<br>エジプト<br>南アフリカ | ロシア<br>中国<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ |
| 「B」 | ブラジル<br>ロシア<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ | イギリス<br>オセアニア<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>中国<br>ブラジル<br>韓国<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ | ポーランド<br>ケニア<br>アフリカ<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>南アフリカ<br>ヨーロッパ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>オセアニア<br>タイ<br>インド<br>イギリス | ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ | アジア<br>オセアニア<br>韓国<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ<br>ブラジル<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ | 南アフリカ<br>韓国<br>アフリカ<br>インド<br>アジア<br>エジプト |
| 「C」 | オセアニア<br>中国<br>ポーランド<br>韓国<br>アジア<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>南アフリカ<br>タイ | ポーランド<br>タイ<br>インド<br>アフリカ | アジア<br>中国<br>韓国 | エジプト<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>アメリカ<br>ブラジル<br>韓国<br>中国<br>アジア<br>ロシア<br>ケニア<br>アフリカ<br>南アフリカ<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ | ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ポーランド<br>中国 | ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ケニア<br>タイ<br>アメリカ<br>ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>イギリス<br>ヨーロッパ<br>ブラジル<br>ポーランド |
| 「D」<br>評価度合いが低い | アフリカ<br>エジプト<br>インド<br>ケニア | エジプト<br>ロシア<br>ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ<br>ケニア<br>南アフリカ | ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>ブラジル<br>アメリカ | タイ<br>インド | ヨーロッパ<br>ロシア<br>イギリス<br>ｱﾝｸﾞﾛｱﾒﾘｶ<br>アメリカ | オセアニア<br>ｽｳｪｰﾃﾞﾝ<br>ｵｰｽﾄﾗﾘｱ |

m：平均値　s：標準偏差値　「A」≧(m＋s)　m≦「B」＜(m＋s)　(m－s)≦「C」＜m　「D」＜(m－s)

④「自然条件が良いー自然条件が悪い」は、オーストラリア、オセアニア、スウェーデンが高く、エジプト、サウジアラビア、韓国が低い。とくにオーストラリアについては、国土の多くが乾燥気候であるが、寺本・市川(1988)[16]が述べているように、児童期から興味をもつ有袋類の存在や観光広告などによる影響が考えられる。一方、エジプトとサウジアラビアには、乾燥気候が評価に影響している。

⑥「工業が盛んであるー工業が盛んでない」や⑨「貿易が盛んであるー貿易が盛んでない」は、とくにアメリカ、アングロアメリカ、イギリス、ヨーロッパ、オーストラリアが高く、ケニア、アフリカ、エジプト、タイが低いことから、これらの評価の要因にはその内容はともかく、先進国か発展途上国かの区別が大きく影響していると考えられる。

⑧「資源が豊かであるー資源が豊かでない」は、とくにサウジアラビアが最も資源が豊かな国として評価されている。その評価の要因には、世界的な石油の産出・輸出国であるという認識が関係している。また全般的には、アメリカ、ロシア、オーストラリア、中国などが高く、韓国、タイ、ポーランドなどが低いことから、この評価には、国土が広く多くの多様な資源を有する国か、国土の小さな国かの区別が考えられる。

総じてみると、いくつかの評価の結果には、実際の地理的事実とのズレがみられる。その原因として、第一に、著しくズレを生じる大陸・国家のイメージは、近接している国家や所属している大陸の特徴が反映される場合が考えられる。また、④「自然条件が良いー自然条件が悪い」と⑩「独自の文化があるー独自の文化がない」では他と比べて標準偏差が小さく、その原因には被験者に細かく評価するための判断材料、つまり関係する既存の知識が不足していることが考えられる。このことから、第二として、知識の不確かさによるズレも考えられる。

情意的イメージの概要は第11表のようになる。主要な傾向がみられる評定尺度は以下のようになっている。

①「危険なー安全な」は、アメリカ、アングロアメリカ、ロシアの旧東西大国が高く、先進国のスウェーデン、オーストラリアが低い。

②「安定なー不安定な」は、イギリス、スウェーデン、オーストラリアなどの先進国が高く、ロシア、インド、アフリカなどの旧社会主義国・発展途上国が低い。

④「暗いー明るい」は、ロシア、南アフリカ、サウジアラビアが高く、ブラジル、アメリカ、オーストラリア、イギリスが低い。とくに「暗い」に顕著なロシア、南アフリカ、サウジアラビアは、③「嫌い」や②「不安定」と同様な傾向にある。

⑧「親しみやすい－親しみにくい」は、オーストラリア、アメリカ、アングロアメリカ、アジアが高く、南アフリカ、ケニア、サウジアラビア、ロシアが低い。ここでは、とくに先進国やアジア隣国への親しみやすさが考えられる。

⑨「静かな－賑やかな」は、ロシア、スウェーデン、エジプトが高く、アメリカ、ブラジル、アングロアメリカ、ラテンアメリカが低い。とくに乾燥・寒冷地域の国家に対して「静かな」と評価され、アメリカ大陸には「賑やか」と評価されている。

⑪「弱い－強い」は、タイ、ケニア、アフリカが高く、アメリカ、アングロアメリカ、イギリス、ロシアが低い。ここでは、認知的イメージの⑫「軍事がある－軍事力がない」の反対傾向にある。

総じてみると、とくに⑤「豊かな－貧しい」の標準偏差は最も大きく、この評定尺度における大陸・国家は細かく評価されている。つまり、被験者には他の評定尺度と比べて、それに関する豊富な既存の知識が存在している。またこの評定尺度の評価の傾向は、認知的イメージの⑥「工業が盛んである－工業が盛んでない」と近似していることから、被験者に先進国や発展途上国に関する知識が存在していることが考えられる。

2　両イメージ因子とその相関

ここでは、以上のような評定尺度調査の結果を踏まえ、因子分析を行い、その結果について考察する。

認知的イメージでは、第12表より、4つの因子（第1N～第4N因子）が導出された。第1N因子は「工業」、「貿易」、「軍事」の負荷量が多く、先進国と発展途上国を軸とした因子として概ね解釈でき、第2N因子は「民族」、「国土」、「資源」の負荷量が多く、国土の大きさを軸とした因子として概ね解釈でき、第3N因子は「人口」、「農業」、「距離」の負荷量が多く、人口や日本との距離に関する因子として概ね解釈でき、第4N因子は「自然」の負荷量が多く、自然条件に関する因子として概ね解釈できる。

情意的イメージでは、3つの因子（第1J～第3J因子）が導出された（第13表）。第1J因子は「好嫌」、「美汚」、「安不」、「暗明」、「危安」の負荷量が、第2J因子は「弱強」、「積消」、「危安」の負荷量が、第3J因子は「静賑」、「危安」、「暗明」の負荷量が、それぞれ多い。これら3つの因子は、既に従来のSD法による結果から一般的となっているオズグッドの「評価」(Evaluation)、「勢力（権力）」(Potency)、「活動」(Activity)の3つの因子からなる情緒的意味体系（岩下,1983, pp.13-20 ）[17]より、概ね捉えることができ[18]、その第1J因子を「評価」、第2J因子を「勢力」、第3J因子を「活動」[19]として解釈することができる。

## 第12表　認知的イメージの因子負荷量

（バリマックス回転後）

| 評定尺度 | 第1N因子 | 第2N因子 | 第3N因子 | 第4N因子 |
|---|---|---|---|---|
| 「工業」 | 0.974 | | | |
| 「軍事」 | 0.938 | | | |
| 「貿易」 | 0.850 | | | |
| 「犯罪」 | 0.633 | 0.511 | | |
| 「民族」 | | 0.926 | | |
| 「国土」 | | 0.856 | | |
| 「資源」 | | 0.832 | | |
| 「人口」 | | 0.559 | 0.758 | |
| 「農業」 | | | 0.729 | |
| 「距離」 | | | − 0.713 | |
| 「文化」 | | | 0.683 | − 0.420 |
| 「自然」 | | | | 0.977 |
| 分散 | 3.352 | 3.155 | 2.345 | 1.400 |
| 分散説明量(%) | 27.935 | 26.294 | 19.544 | 11.664 |
| 累積説明量(%) | 27.935 | 54.229 | 73.774 | 85.438 |

因子負荷量の絶対値 0.400 以上のみを表示

## 第13表　情意的イメージの因子負荷量

（バリマックス回転後）

| 評定尺度 | 第1J因子 | 第2J因子 | 第3J因子 |
|---|---|---|---|
| 「好嫌」 | 0.941 | | |
| 「住難易」 | − 0.925 | | |
| 「重軽」 | − 0.925 | | |
| 「安不」 | 0.871 | 0.406 | |
| 「暗明」 | − 0.861 | | |
| 「美汚」 | 0.824 | | 0.451 |
| 「親易難」 | 0.730 | 0.438 | |
| 「豊貧」 | 0.727 | 0.631 | |
| 「弱強」 | | − 0.960 | |
| 「積消」 | | 0.809 | − 0.426 |
| 「静賑」 | | | 0.906 |
| 「危安」 | − 0.489 | 0.414 | − 0.674 |
| 分散 | 6.275 | 2.898 | 1.925 |
| 分散説明量(%) | 52.290 | 24.150 | 16.039 |
| 累積説明量(%) | 52.290 | 76.440 | 92.479 |

因子負荷量の絶対値 0.400 以上のみを表示

オズグッドは、情緒的意味体系の構成が言語圏・文化圏を超えた一般性をもつ（岩下, 1983）[20]、と主張していることから、この情意的イメージの3つの因子は、人間に共通する本能に近い、潜在的な因子として捉えられる。つまり、本研究の評定尺度の設定や測定法が一応妥当であったと考えられる。また、この3つの因子の分散説明量は、①「評価」（ 52.290 ）、②「勢力」（ 24.150 ）、③「活動」（ 16.039 ）となり、その説明量からみる、その因子の重要度は、SD法結果に対するオズグッドの一般的な見解（岩下,1983）[21]と一致することになる。

例えば、各因子において最も因子負荷量の絶対値の大きい評定尺度から、その重要度を解釈してみると、①「好嫌」(0.941)→②「弱強」(-0.960)→③「静賑」(0.906)の序列に従って、「好きか嫌いか→強いか弱いか→静か賑やか」というような重要度のもとで、大陸・国家に対するイメージの情意的側面が描かれる。

次に問題とするのは、そのような情意的イメージと認知的イメージとの関係である。そこで、因子負荷量より、両イメージの因子間の相関を分析してみると[22]、第1J因子と第4N因子（相関係数: 0.809 ）、第2J因子と第1N因子(0.912)、第3J因子と第3N因子(0.565)、第3J因子と第2N因子(0.427)が、それぞれ相関する結果となった。これにより、例えば、情意的イメージをもとにして認知的イメージをみてみると、「好きであれば自然条件が良い」、「強ければ工業が盛んである」、「賑やかであれば人口が多く、民族も多い」などの解釈が可能となる。

以上から、このような両イメージ因子間の相関の結果と、これまでの因子分析の結果をまとめてみると、第8図のようになる。これによって、認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像は統計的に要約される。そして、各大陸・国家のイメージの特徴やその近似、またそれに関係する主要な評定尺度や因子とそれらの関係について、総括的、構造的に捉えてみることができる。ただし、本研究の限られた評定尺度（数）の中では、それらの関係を十分に提示し、説明しきれない部分も残る。

## 認知的イメージ

| 因子 | 高い← 第1N因子 →低い | 高い← 第2N因子 →低い | 高い← 第3N因子 →低い | 高い← 第4N因子 →低い |
|---|---|---|---|---|
| 代表する評定尺度 | 盛ん← 「工業」 →でない<br>ある← 「軍事力」 →ない<br>盛ん← 「貿易」 →でない<br>多い← 「犯罪」 →少ない | 多い← 「民族」 → 少ない<br>広い← 「国土」 → 狭い<br>豊か← 「資源」 → でない<br>多い← 「人口」 → 少ない<br>多い← 「犯罪」 → 少ない | 多い← 「人口」 → 少ない<br>盛ん← 「農業」 → でない<br>近い← 「距離」 → 遠い<br>ある← 「文化」 → ない | 良い← 「自然」 → 悪い<br>ない← 「文化」 → ある |
| 典型大陸・国家（平均因子得点0.8以上） | アメリカ<br>アングロアメリカ<br>イギリス<br>ヨーロッパ<br>ケニア<br>アフリカ<br>インド | アフリカ<br>ラテンアメリカ<br>アジア<br>中国<br>インド<br>アメリカ<br>ブラジル<br>韓国<br>イギリス<br>スウェーデン<br>タイ<br>ポーランド | アジア<br>中国<br>インド<br>韓国<br>サウジアラビア<br>オセアニア<br>南アフリカ | オーストラリア<br>オセアニア<br>スウェーデン<br>サウジアラビア<br>エジプト<br>ロシア |

相関（太線 p <0.01　点線 p< 0.1）

| 因子 | 評価<br>良い← 第1J因子 →悪い | 勢力<br>ある← 第2J因子 →ない | 活動<br>ある← 第3J因子 →ない |
|---|---|---|---|
| 代表する評定尺度 | 好きな ←・→ 嫌いな<br>住みやすい　住みにくい<br>軽い　重い<br>安定な　不安定な<br>明るい　暗い<br>美しい　汚い<br>親しみある　親しみない<br>豊かな　貧しい<br>安全な　危険な | 強い ←・→ 弱い<br>積極的な　消極的な<br>豊かな　貧しい<br>親しみある　親しみない<br>危険な　安全な<br>安定な　不安定な | 賑やかな ←・→ 静かな<br>危険な　安全な<br>汚い　美しい<br>積極的な　消極的な |
| 典型大陸・国家（平均因子得点0.8以上） | オーストラリア<br>スウェーデン<br>オセアニア<br>イギリス<br>ロシア<br>サウジアラビア | ロシア<br>アメリカ<br>アングロアメリカ<br>イギリス<br>ヨーロッパ<br>タイ<br>インド<br>ケニア<br>アフリカ | ブラジル<br>アメリカ<br>ラテンアメリカ<br>アングロアメリカ<br>スウェーデン<br>ポーランド<br>ロシア |

## 情意的イメージ

第8図　認知的側面と情意的側面の関係を中心とする
イメージの全体像

## 第4節　各大陸・国家のイメージの主要な内容

ここでは、自由連想法調査の結果である第14表（出現率10%以上の象徴要素）より、各大陸・国家に対するイメージの主要な内容について考察する。その方法については、まず第14表から、一つのめやすとして出現率が20%以上の象徴要素を、イメージの中心を形成する事項として捉える。ただし、出現率がややそれより低くとも、出現率の高いものに比較的に類似する象徴要素の場合には、その中心に含めて考える。また、その他の象徴要素は、その中心事項の周囲にある事項として捉える。以上によって、それらの象徴要素が得られた背景にある被験者の認識について考察してゆく。

（1）アジアについては、「発展途上国」、「米」、「黄色人種」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、戦前の植民地、稲作とその食文化、アジアで多くみられる人種などに関する認識が反映されている。その他、「人口が多い」や「広い」には中国やインドに代表される人口問題や国土面積に関する認識が、「日本・日本人」には被験者のアジアに属する日本の国民としての認識が、それぞれ反映されている。

（2）アフリカについては、「貧困」、「砂漠」、「黒人」、加えて「発展途上国」、「あつい」などがイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、飢餓、内戦、砂漠化などによる貧困、戦前の植民地、広大なサハラ砂漠の存在、中南アフリカで顕著な人種などに関する認識が反映されている。その他、「動物」には、サバナにおける野生動物に関する認識が反映されている。

（3）ヨーロッパについては、「白人」や「EU・EC」、加えて「先進国」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、ヨーロッパに広がる人種、ヨーロッパの代名詞とも言える超国家、その中心となるイギリス、フランス、ドイツ、イタリアといった先進国などに関する認識が反映されている。その他、「きれい・美しい」や「裕福・ゆとり・豊か」には、冒頭でも述べたが、日本社会のもつ価値観が反映されている。

（4）アングロアメリカについては、「アメリカ・カナダ」、「先進国・工業発達」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。その他、「広い」、「人種問題・多民族」、「五大湖」には、両国共通の特徴や国境に関する認識が反映されている。

## 第14表　大陸・国家に対する象徴要素

| 大陸・国家 | 回答数 | 象徴要素 |
|---|---|---|
| (1)アジア | 232 | 発展途上国 32.2, 米 32.2, 黄色人種 22.0, 人口が多い 14.4, 広い 10.2, 日本・日本人 10.2 |
| (2)アフリカ | 276 | 貧困 42.4, 砂漠 30.5, 黒人 29.7, あつい 18.6, 動物 16.1, 発展途上国 11.0 |
| (3)ヨーロッパ | 255 | 白人 36.4, EU・EC 24.6, 先進国 12.7, きれい・美しい 12.7, 裕福・ゆとり・豊か 11.0 |
| (4)アングロアメリカ | 210 | アメリカ・カナダ 23.7, 先進国・工業発達 18.6, 広い 12.7, 五大湖 11.0, 人種問題・多民族 11.0 |
| (5)ラテンアメリカ | 231 | 陽気・明るい 17.8, アマゾン・ジャングル・セルバ 16.9, サンバ・カーニバル 16.9, あつい 16.9, コーヒー・プランテーション 15.3, 発展途上国 10.2, 植民地 10.2 |
| (6)オセアニア | 210 | 海 37.3, 島国・島々 27.1, 暖かい 15.3, 大自然 12.7, 羊・羊毛 11.0, オーストラリア・ニュージーランド 10.2, 観光地楽園 10.2 |
| (7)韓国 | 260 | キムチ 51.7, NIES・工業発展 20.3, 過去の日本の圧迫・日本を嫌っている 16.1, 物価が安い 11.0, 日本と近い 11.0, 朝鮮戦争 11.0, ソウルオリンピック 10.2, ハングル文字 10.2 |
| (8)中国 | 325 | 人口が多い 44.1, 中華料理 31.4, 自転車 29.7, 長い歴史 16.9, 広い 14.4, 米 13.6, 社会主義・毛沢東 12.7, 万里の長城 10.2 |
| (9)タイ | 249 | 米 80.5, 仏教 17.8, トムヤンクン・タイ料理 17.8, エムタイ 11.9, キックボクシング 10.2 |
| (10)インド | 315 | カレー 46.6, ヒンドゥー教 34.7, 綿花 25.4, 仏教 14.4, ガンジー 14.4, 象 14.4, カースト制度 14.4, インダス川・ガンジス川 11.9, 貧しい 11.9, タージマハル 11.9, 人口が多い 10.2 |
| (11)サウジアラビア | 233 | 石油 74.6, 砂漠 28.0, イスラム教・メッカ 18.6, 中東・湾岸戦争 12.7, 民族衣装 11.9, サッカー 11.9 |
| (12)エジプト | 324 | ピラミッド 77.1, 砂漠 57.6, ナイル川 49.2, スフィンクス 16.9, 古代文明 11.0 |
| (13)ケニア | 216 | 動物 36.4, 黒人 23.7, カカオ・コーヒー 16.9, 草原・サバンナ 15.3, あつい 11.0 |
| (14)南アフリカ | 296 | アパルトヘイト 95.8, ダイヤモンド 45.8, 金 44.1, マンデラ 15.3 |
| (15)イギリス | 272 | 王室 41.5, 産業革命 22.9, ロンドン 12.7, ビッグベン 12.7, 紅茶 12.7, 紳士 10.2, 白人 10.2, 先進国 10.2 |
| (16)スウェーデン | 234 | 高齢化社会・社会福祉制度の充実 34.7, 寒い 24.6, 北欧 14.4, 氷河期 11.0, スキー 10.2, 森林資源 10.2 |
| (17)ポーランド | 178 | 東欧 12.7, 分割 12.7 |
| (18)アメリカ | 325 | 自由 49.2, 治安が悪い・犯罪が多い 28.8, 銃 16.9, 黒人差別 16.1, 農業・広い 11.9, ニューヨーク・大都市 11.9, クリントン大統領 11.0, 映画 10.2, 大リーグ野球 10.2, 世界の中心 10.2, 先進国・経済大国 10.2 |
| (19)ブラジル | 308 | コーヒー 71.2, サッカー 55.9, サンバ・カーニバル 42.4, 熱帯雨林・ジャングル・アマゾン(川)35.3, 日系人・マルシア 14.4, あつい 11.9, |
| (20)オーストラリア | 322 | コアラ 48.3, 羊・羊毛 28.0, カンガルー 21.2, 温暖・四季 15.3, 広い 15.3 砂漠 12.7, 動物 11.0, 海 11.0 大自然 10.2 |
| (21)ロシア | 298 | 寒い・ツンドラ 48.3, 社会主義崩壊・ゴルバチョフ・ペレストロイカ 20.3, エリツィン大統領 18.6, 広い 16.9, 経済不安定 16.1, シベリア・タイガ 12.7, シベリア鉄道 11.9, チェルノブイリ原発事故 10.2 |

数値は全回答者に対する出現率（10.0%以上を表示）

(5)ラテンアメリカについては、出現率がやや下がるが、「陽気・明るい」、「アマゾン・ジャングル・セルバ」、「サンバ・カーニバル」、「あつい」、「コーヒー・プランテーション」などが、イメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、熱帯気候に関係する自然や農業、祭りや人々の気質などに関する認識が反映されている。その他、「発展途上国」や「植民地」には、戦前の植民地や発展途上国に関する認識が反映されている。

(6)オセアニアについては、「海」や「島・島々」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、海洋の島々に関する認識が反映されている。その他、「暖かい」、「大自然」、「観光地・楽園」には熱帯気候における自然や観光に関する認識が、「羊・羊毛」には動物や産業に関する認識が、それぞれ反映されている。

(7) 韓国については、「キムチ」や「NIES・工業発展」、加えて「物価が安い」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、日本に馴染みのある食文化が顕著となり、加えて発展途上国に関する認識が反映されている。その他、「過去の日本の圧迫・日本を嫌っている」には日本との歴史的関係に関する認識が、「日本と近い」には同じアジアの隣国に関する認識が、「朝鮮戦争」には隣国の歴史に関する認識が、「ソウルオリンピック」には近年の出来事に関する認識が、「ハングル文字」には文化に関する認識が、それぞれ反映されている。

(8)中国については、「人口が多い」、「中華料理」、「自転車」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、世界一の人口、日本にも馴染みのある食文化や生活などに関する認識が反映されている。その他、「長い歴史」や「万里の長城」には日本と関係深い歴史などに関する認識が、「広い」には国土面積に関する認識が、「米」には農業や食文化に関する認識が、「社会主義・毛沢東」には社会体制に関する認識が、それぞれ反映されている。

(9)タイについては、「米」が著しく高い出現率となり、イメージの中心を形成する事項として捉えられている。その事項には、輸出量において世界一となる米生産に関する認識が反映されている。その他、「仏教」や「トムヤンクン・タイ料理」には宗教や食文化に関する認識が、「エムタイ」と「キックボクシング」にはスポーツ文化に関する認識が、それぞれ反映されている。

(10)インドについては、「カレー」、「ヒンドゥー教」、「綿花」、加えて「仏教」や「タージマハル」がイメージを形成する事項として捉えられている。それらの事項には、日本にも馴染みのある食文化、宗教、農業などに関する認識が反映されている。その他、「ガンジー」には歴史や政治に関する認識が、「象」には生活や文化に関する認識が、「カースト制度」には歴史や社会体

制に関する認識が、「インダス川・ガンジス川」には古代文明や自然に関する認識が、「貧しい」と「人口が多い」には生活や経済に関する認識が、それぞれ反映されている。

(11)サウジアラビアについては、「石油」が著しく高い出現率となり、加えて「砂漠」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、世界に誇る石油の生産・輸出や乾燥地域に関する認識が反映されている。その他、「イスラム教・メッカ」や「中東・湾岸戦争」には宗教や戦争に関する認識が、「民族衣装」や「サッカー」には生活や文化、ワールドカップサッカーに関する認識が、それぞれ反映されている。

(12)エジプトについては、「ピラミッド」が著しく高い出現率となり、そして「砂漠」や「ナイル川」、加えて「スフィンクス」や「古代文明」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、古代エジプト文明と自然に関する認識が反映されている。

(13)ケニアについては、「動物」や「黒人」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、野生動物や中南アフリカで顕著な人種に関する認識が反映されている。その他、「カカオ・コーヒー」、「草原・サバンナ」、「あつい」などには、熱帯や乾燥地域における植生や農業に関する認識が反映されている。

(14)南アフリカについては、「アパルトヘイト」が著しく高い出現率となり、そして「ダイヤモンド」や「金」、加えて「マンデラ」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、社会制度や豊かな資源に関する認識が反映されている。

(15)イギリスについては、「王室」や「産業革命」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、歴史に関する認識が反映されている。その他、「ロンドン」と「ビッグベン」には世界的な都市や名所に関する認識が、「紅茶」と「紳士」には歴史、生活、文化に関する認識が、「白人」には人種に関する認識が、「先進国」には世界的な先進国に関する認識が、それぞれ反映されている。

(16)スウェーデンについては、「高齢化社会・社会福祉制度の充実」や「寒い」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、社会制度や冷帯気候に関する認識が反映されている。その他、「北欧」にはヨーロッパでの位置に関する認識が、「氷河期」にはフィヨルドなどの自然地形に関する認識が、「スキー」にはスポーツに関する認識が、「森林資源」には植生や産業に関する認識が、それぞれ反映されている。

(17)ポーランドについては、回答数も少なく、出現率の高い象徴要素がみられないことから、明確なイメージの中心が描かれていない。ただし、やや薄れたイメージとして、「東欧」にはヨーロッパでの位置に関する認識が、「分割」には歴史に関する認識が、それぞれ反映されている。

(18)アメリカについては、「自由」や「治安が悪い・犯罪が多い」、加えて「銃」がイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、世界的な自由主義国としての社会体制に関する認識が反映されている。その他、「黒人差別」には歴史や社会問題に関する認識が、「農業・広い」には広い国土とそれに関係する大規模農業に関する認識が、「ニューヨーク・大都市」、「クリントン大統領」、「世界の中心」、「先進国・経済大国」には、世界的な政治経済や都市に関する認識が、「映画」や「大リーグ野球」には文化やスポーツに関する認識が、それぞれ反映されている。

(19)ブラジルについては、「コーヒー」、「サッカー」、「サンバ・カーニバル」、「熱帯雨林・ジャングル・アマゾン川」、加えて「あつい」などがイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、熱帯気候に関する自然、農業、生活、文化に関する認識が反映されている。その他、「日系人・マルシア」には、ブラジルと日本との関係からもたらされる認識が反映されている。

(20)オーストラリアについては、「コアラ」、「羊・羊毛」、「カンガルー」、加えて「動物」などがイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、オーストラリア特有の動物、そして農業に関する認識が反映されている。その他、「温暖・四季」や「砂漠」には気候に関する認識が、「広い」には広い国土に関する認識が、「海」や「大自然」には島国や観光に関する認識が、それぞれ反映されている。

(21)ロシアについては、「寒い・ツンドラ」、「シベリア・タイガ」、「社会主義崩壊・ゴルバチョフ・ペレストロイカ」、「エリツェン大統領」、加えて「経済不安定」などがイメージの中心を形成する事項として捉えられている。それらの事項には、気候や植生などの自然や、社会経済体制に関する認識が反映されている。その他、「広い」や「シベリア鉄道」には国土の広さに関する認識が、「チェルノブイリ原発事故」には国際的な事故や問題に関する認識が、それぞれ反映されている。

以上の(1)～(21)の結果から、例えば、アフリカ、ケニア、南アフリカでみられる象徴要素は、藤井(1994)[23]の中学校地理教科書のアフリカ地誌記述の分析から得られたキーワード(8社中3社以上でみられるもの、すなわち、「植民地支配」、「焼畑」、「プランテーション」、「農・鉱山物」、「モノカルチュアー」、「内戦」、「砂漠化・かんばつ」、「アパルトヘイト」)と一致するところが多い。ただし、象徴要素の「人種」と「動物」は、教科書記述のキーワードからみることはできず、それには写真資料やTVによる影響が考えられる。また、アメリカでみられる象徴要素は、真鍋(1998)の日本のTV・CM(1990-1992)の分析結果[24]からも説明できるように、マスメディアの影響によって、

他の大陸・国家と比べて多種多様に存在していることがうかがえる。さらに、掘り下げみると、タイの米、エジプトのピラミッド、南アフリカのアパルトヘイトなど、出現率が75%以上の象徴要素がみられる国家においては、得られる象徴要素の総数が少なくなり、一方で韓国、中国、インド、アメリカでは数多くなる。言うまでもなく、その差異の生じる要因には、日本との交流が盛んであるかないか、多種多様な情報が得られるかどうかであろう。つまり、各大陸・国家のイメージの主要な内容の多くは、これまでもよく指摘されたことであるが情報流通上の学校教育の教科書(特にサブタイトル・太字)やマスメディアの影響を受けた情報によって強く反映されたものであると考えられよう。

## 第5節　まとめ

本章の主な結果は次の4つのとおりである。

(1)評定尺度調査の結果より、認知的イメージにおけるいくつかの評価には、実際の地理的事象とのズレが所々みられた。その原因には、近接する国家や所属する大陸の特徴が強く反映される場合や、関係する既存の知識が不足し、詳細に評価できない場合が考えられた。

(2)因子分析の結果より、とくに情意的イメージでは、3つの因子が導出され、オズグッドの主張と同様な、「評価」、「勢力」、「活動」と概ね解釈した。

(3)両イメージの因子間には4つの相関がみられ、これまでの分析の結果は第8図にまとめられた。これにより、認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像は明らかになった。

(4)各大陸・国家のイメージの主要な内容の多くは、生徒が認識した、情報流通上のフィルターとなる学校教育の教科書やマスメディアの影響を受けた情報が、強く反映されたものであると考えられた。

なお、以上の研究結果の一部には、評定尺度や国家の選定の点で十分に説明しきれないものもみられた。課題としては、両側面の定義づけ、そして評定尺度などに対して、多様な角度から再度検討してみる余地が残されている。

## 註－第4章－

1)①内田順文「都市の『風格』について－場所イメージによる都市の評価の試み－」『地理学評論』vol.59(5), 1986, pp.276-290. ②内田順文「地名・場所・場所イメージ－場所イメージの記号化に関する試論－」『人文地理』vol.39(5), 1987, pp.391-405.

2)水島恵一「イメージの人間学的理論に向けて」水島恵一・藤岡喜愛・土沼雅子『イメージの人間学』誠信書房, 1989, pp.237-273.

3)陸川晃「イメージ分析による地理的世界認識の研究－認知・情意的側面から中学生の変容傾向を中心に－」『上越社会研究』vol.9, 1994, pp.56-69.

4)岩下豊彦『SD 法によるイメージの測定：その理解と実際の手引き』川島書店, 1983.

5)類似した語句の頻度を回答者数にて割った比率(%)。

6)前掲 1)②, 内田(1986)の用語に基づく。

7)伊藤悟「北陸地方における都市イメージとその地域的背景」『人文地理』vol.46(4), 1994, pp.353-371.

8)広大なユーラシア大陸は三つに分け、アジア・ロシア(国家)・ヨーロッパと区分した。オーストラリアは大陸と国家規模と重なるため、それを含むオセアニア(州)を大陸と同等の扱いとした。南北アメリカ大陸は、イメージに反映されやすい社会的等質性を踏まえ、アングロアメリカとラテンアメリカの区分とした。ところで、大陸と国家は、地理学の上で随分違った概念であり、含む含まれるの関係にあるが、本研究では、地理学習において、それが地域単位として使われることが多いことから、その意味において割り切って並べて分析してもよいと考えた。ただし、結果としてのイメージの重なり合いについては積極的に読み取っていくことにした。

9) 1995 年 4 月中旬に、被験者 40 名に対して、選定された大陸・国家に対する自由連想法(記入は各被験者について3つ)調査を行い(全て有効)、出現率が 20 %(類似語句の合計頻度8回)以上の語句を参考にした。

10)ザーリネン(1976, pp.168-175)では①近接性、②形態、③面積、④国際情勢、⑤文化的要因の五つとなるが、本研究では、①＝「距離」、③＝「国土」と対応させた。ザーリネン「学生のもっている世界観」ダウンズ・ステア編(吉武泰水監訳)『環境の空間的イメージ－イメージ・マップと空間認知－』鹿島出版会, 1976, pp.162-176.

11)「(国土が)広い」・「あつい」・「寒い」・「暖かい」の出現率が高い結果となったが、認知的イメージの「空間」を意味する「国土」・「自然」の評定尺度と直接的に関係することが考えられ、情

意的イメージの評定尺度として用いなかった。

12）井上証明・小林利宣(1985)において、国家・都市イメージに関する形容詞対の使用頻度表（ p.255,TABLE2 ）における合計頻度3以上のものを特に参考にした。ただし、選定した評定尺度「静かなー賑やかな」は、予備調査結果を参考に、井上・小林の「静かなーうるさい」と「さびしいー賑やかな」を合わせたものである。井上証明・小林利宣「日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観」『教育心理学研究』vol.33, 1985, pp.253-260.

13） 1995 年 4 月下旬に調査を実施した。無効となったサンプルは、回答が一部不鮮明に記入されたものである。

14）質問内容、「あなたが、以上の 15 ヶ国・ 6 大陸から連想するものごとを自由に3つあげなさい」。

15）予備調査を 1995 年 12 月下旬に 40 の被験者に対して行い、本調査は 1996 年 1 月下旬に実施した。なお、調査後に得られた象徴要素の多くが、その内容からしてSD法調査後の約8ヶ月間の地歴・公民科学習によって、強く反映されたものではないと判断できた。

16）寺本潔・市川靖子「第5部大学生のオセアニア認識の形成過程」愛知教育大学地理学教室編『国際理解教育と教員養成』, 1988, pp.51-100.

17）前掲 4).

18）中学生を対象とした研究からも同様の傾向が得られている（前掲3), 陸川, 1994 ）。

19）「活動」と解釈された因子は、他の因子の解釈とは反対となり、マイナスの負荷量が「活動性がある」の意味と解釈でき、プラスの負荷量が「活動性がない」の意味となる。

20）前掲 4).

21）前掲 4).

22）順位相関係数による相関分析を行った。ただし、第3J因子の「活動性がある」は他の因子と異なり、マイナスの因子負荷量（と因子得点）となり、相関分析ではそのプラスとマイナスを逆にした。

23）藤井広志「中学校地理教科書のアフリカ地誌記述の分析ー平成 5 年本を中心にー」『兵庫教育大学研究紀要』vol14, 1994, pp.121-129.

24）真鍋一史『国際イメージと広告』日経広告研究所, 1998, pp.27-60. その分析結果とは、アメリカのイメージのコマーシャル数が極めて多く(頻度： 188)、次いでヨーロッパの国々(79)、中国(7)、オーストラリア・ニュージーランド(5)、アフリカ(2)、エジプト(1)、ケニア(2)となっている。

# 第5章　世界イメージ形成に影響を及ぼす要因

本章の目的は、前章の結果を踏まえて、別のアンケート調査の結果（世界イメージ形成に関する選好・経験・記憶などについての記述調査、大陸における構成国に関する位置認知調査）から、世界イメージ形成に、学校教育やマスメディアが強く影響を与えている点について検討し、そのイメージ形成の要因について追究してゆくことである。ここでの調査の被験者は、前章の被験者と同じ新潟県内S高等学校の2年生 118 人（男子 60 ・女子 58 ）であり、記述調査の項目と方法は次の9つである。

①大陸・国家の中から、とくに「詳しく知っている国」と、「詳しく知らない国」を2つあげさせ、その理由を記述させた[1)]。

②行きいたい国を自由に3つあげさせ、その理由を記述させた[2)]。

③マスメディアから得た情報の中から、強く興味・関心をもつ国家を自由に3つあげ、その情報源と内容について記述させた[3)]。

④家族の海外旅行経験者の行き先とその目的、受けた影響について自由に記述させた[4)]。

⑤外国に関する地域社会から直接的に強く受けた影響について自由に記述させた[5)]（この項目は調査後、有意な回答が得られなかったので考察から除外している[6)]）。

⑥中学校と高等学校での生活を通して、社会科と地理歴史・公民科以外の他教科・部活動から受けた外国に対する興味・関心について自由に記述させた[7)]。

⑦被験者が経験した小学校時代の社会科地理授業の中で、とくに記憶に残っている外国に関する授業について記述させた[8)]。

⑧被験者が経験した中学校時代の社会科地理授業の中で、とくに記憶に残っている外国に関する授業について記述させた[9)]。

⑨中学校時代に被験者が経験した高校受験を強く意識した地理学習の中で、最も得意であった外国名とその理由を記述させた[10)]。

以上による調査を実施[11)]した結果、回答者全員の有効回答 118 票が得られた。また、位置認知調査は、アジア、ヨーロッパ、南アメリカの3つの大陸を事例に取り上げ、同様の被験者 118 人に、大陸ごとに国境線のみが描かれている白地図[12)]に、番号付き全構成国名を載せて、対応する国境線内に、その番号を記させることによって正答率を求めた[13)]。その結果、回答者全員の有効 118 票が得られた。

## 第1節　知名度と行ってみたい国

### 1　知名度に関するイメージ（調査項目①）

「詳しく知っている国」については、全回答数 136 から、アメリカ(回答数,49)、中国(26)、イギリス(16)、オーストラリア(11)と続く結果となった。その主な理由は、とくにTVのニュースや他の番組から情報を受けることが中心となっているが、それ以外では、例えば、アメリカの場合は、雑誌や新聞でよく見る、日本と関係深いからよく勉強している、映画でよく見るなどである。つまり、その多くは、マスメディア（TV）と学校教育（社会科関連）による情報流通の影響である。この傾向は、前述の真鍋(1998)の分析の結果とほぼ一致し、TV・CMからもその影響を説明できる。

一方、「詳しく知っていない国」は、全回答数 217 から、ポーランド(回答数,101)、ケニア(59)、スウェーデン(17)と続く結果となった。その主な理由は、ポーランドの場合は、前章の象徴要素の希薄な結果からも説明できるように、位置もよくわからず、TVからの情報もほとんど入らない、話題にならないなどとなる。ケニアの場合は、動物や自然は浮かぶがその他は思い浮かばない、情報が入らず興味がないなどとなり、被験者には情報受信の意識が見られず、TVの他に、学校での取り上げも含め、それらの国家に対する情報流通が少ないようである。そのイメージも、前章の象徴要素の結果からもみられるように、中南アフリカ全般の乾燥地域に関するイメージが形成されており、おそらく、TVにおける野生動物に関する情報の影響が強く反映していることが考えられる。

### 2　行ってみたい国に関するイメージ（調査項目②）

ここでは、全回答数 232 が得られ、オーストラリア(回答数,46)、アメリカ(42)、イタリア(23)、フランス(21)、中国(14)、イギリス(14)となった。その主な理由は、興味・関心の高い観光であった。例えば、オーストラリアの場合では、前章の象徴要素からも説明できるように、豊かな自然環境・珍しい動物・広い国土・南半球や気候・観光への興味などとなり、豊かな自然環境に基づく観光について注目されている。

## 第2節　世界イメージ形成に影響を及ぼす社会的要因

1　マスメディアの影響（調査項目③）

ここでは、総回答数 187 から、フランス・TV(回答数,72)、アメリカ・TV(38)、中国・TV(19)、イギリス・TV(13)、アメリカ・本(9)、フランス・新聞(8)、オーストラリア・TV(7)、フランス・本(6)、ボスニアとヘルツェゴビナ・TV(6)と続く結果となった。とくに話題性のある、国際世論となったムルロア環礁でのフランスの核実験に対して非常に高い関心が持たれた。同様に、象徴要素でも見られたイギリスの王室問題、ボスニア・ヘルツェゴビナの紛争にも関心が持たれた。フランス・本からは、ファッションに関心が待たれ、他と比べ、能動的な情報獲得の一面もみられる。総じてみると、短期に流通する非日常的な情報による影響と、長期的に流通している日常的な情報による影響がみられる。ただし、やはり、欧米、中国、オーストリアに対する後者の情報流通の影響の方が、世界イメージ形成を規定する基盤となっていることは揺るぎないであろう。

2　家族の海外旅行経験からの影響（調査項目④）

ここでは、総回答数 101 から、アメリカ(回答数,22)、韓国(10)、中国(9)、シンガポール(9)、フランス(8)、イギリス(4)、オーストラリア(4)、台湾(4)、香港(4)と続く結果となった。その目的は、観光(35)、仕事(8)、その他(7)となり、観光を目的とした欧米と隣国アジア諸国からの影響が強くうかがえる。

3　社会科関連以外の授業・部活による影響（調査項目⑥）

ここでは、総回答数 54 から、世界全体(回答数,16)、アメリカ(8)、中国(4)、英語圏(4)、イギリス(3)、カナダ(3)、イタリア(3)と続く結果となり、主に英語の授業(22)から英語圏の国々に対する影響がみられた。この結果から、被験者には無意識となる、欧米と中国に関する潜在的な情報による影響が考えられる。

## 第3節　記憶に残る外国に関する地理学習－学校地理教育からの影響－

1　小学校時代の社会科地理授業（調査項目⑦）（第15表）

回答の多いものは、アメリカ(12)、世界(9)となった。アメリカの場合は、主に日本との貿易関係による農業や工業に関する授業内容が、世界の場合は、世界の国々の位置、国旗、首都当てなど、楽しみながら行う活動的な授業内容が、それぞれ顕著となった。この結果から、小学校5年

生のアメリカと日本の関係に基づく産業学習、あるいは世界の国々に関する学習が考えられる。

2　中学校時代の社会科地理授業（調査項目⑧）（第16表）

回答の多いものは、世界(回答数,18)、アメリカ(15)、ヨーロッパ(11)、中国(7)となった。世界の場合は、地図を利用して、気候、地形、資源の産地などに関する作業的な学習が顕著となり、アメリカの場合は、地図を利用した農業や工業に関する授業内容が顕著となった。また、ヨーロッパの場合は、ヨーロッパの国々を比較しながらみる学習やルール地方やライン川周辺の工業地域に関する授業内容が顕著となり、中国の場合は、主に農業地域区分や農産物に関する授業内容が顕著となった。この結果から、農業と工業を中心とした欧米と中国の学習が考えられる。

3　高等学校受験のための地理学習（調査項目⑨）（17表）

回答の多いものは、アメリカ(回答数,44)、ヨーロッパ(34)、オーストラリア(19)、中国(16)となった。とくに上位3つをみると、アメリカの場合は、五大湖沿岸工業地帯、適地適作農業のように、工業と農業に関するより具体的な知識を伴う学習内容が生徒の印象に残っていることである。その理由には、覚えやすかった、何回も教えてくれた、重要であると思った、興味があったなどがある。つまり、アメリカは、受験勉強において重要で、かつ身近で興味をもつ国であることがうかがえる。ヨーロッパの場合は、気候、地形、農業、工業などの多様な学習内容が顕著となった。その理由には、国々をその地理的特徴から比較しながら学習することによって、楽しかった、覚えやすかった、興味がもてた、あるいは受験には重要であったなどとなり、総体的にはアメリカと同様である。オーストラリアの場合は、資源、農業、工業に関する授業内容が顕著となった。その理由には、行ってみたい、好きだから、覚えやすかったなどがある。この傾向は、欧米の傾向に対して、被験者がより能動的に学習する情意的な部分が強く影響している点で異なるであろう。

4　記憶に残る国とは

以上の結果から、記憶に残る世界の国々を総計してみると、アメリカ(回答数,71)、ヨーロッパ(48)、世界(32)、中国(24)、オーストラリア(23)となった。記憶の重複も考えられるが、地理学習における被験者の記憶に残る世界の国々は、先の第1節、第2節の結果と同様に、欧米、中国、オーストラリアである。そこには、授業者の世界の国々の取り扱いや思い、教科書記述、日常生活におけるマスメディアなどの複合的かつ重層的な影響がうかがえる。つまり、被験者には、その国の内容はともかく、単に、世界の国々に関する順序立てが潜在的に形成されており、それが地

理的認識の評価尺度となって、世界イメージ形成に影響を及ぼしていると考えられる。

## 第15表　小学校時代に記憶に残る外国に関する地理授業

| 地域 | No. | 授業内容・方法 |
|---|---|---|
| アメリカ | 1 | デトロイトで車が多く作られていることが印象に残っています。日本とアメリカの車の生産について表で調べたり比べたりしました。 |
| | 2 | 五大湖周辺の工業や農業図を書いたりした。 |
| | 18 | アメリカの広大な土地と日本の輸出入。 |
| | 45 | 農業と気候について。先生がメキシコの日本人学校にいたため、海外からの食料が、おくれてくることがあり、その送られてきた、カルフォルニア米の実物をみて、話をしてもらったり、"アメリカの〇〇州は、△△気候だから、米の生産が多い。"とかも話してもらい、実際にカルフォルニア米のピラフも食べた。 |
| | 58 | よく覚えていないが、アメリカ、アジア、ヨーロッパで特に大きな国については良く習ったと思う。 |
| | 62 | 国民の生活形式など。日本(自分たち)との生活を比較。 |
| | 63 | 山脈・川・盆地の名前などを地図を見ながら。 |
| | 65 | 工業が発達している都市名(デトロイトなど)南部の半導体を作っている様子や、西海岸の飛行機工場の様子などをビデオで見た。 |
| | 71 | 農業でカルフォルニア州などで輸出用のくだものを栽培していること。あと輸出用牛肉など。 |
| | 87 | アメリカと日本の貿易、円グラフや棒グラフを使った授業。 |
| | 97 | アメリカと日本との関係。 |
| | 102 | 日本の米と、アメリカの米について。図書室に行って本で調べた。 |
| 世界全体 | 15 | 全地域の主な国の位置を地図で確認。 |
| | 19 | 国旗あてクイズ。 |
| | 32 | アメリカ・イギリス・フランスなどの先進国やソ連・中国などの大国家などの主な輸出入物、産出物、政治の状況などを簡単に学んだ。映像や大きな地図などを用いた授業があった。 |
| | 42 | 赤道付近の国は暖かいこと。 |
| | 83 | 自分達の好きな国を選んで、その国について人口や気候・特色などを調べ、地理新聞というものを作って発表しあった。 |
| | 84 | 南半球では、季節が日本とは逆であること。 |
| | 92 | 小学校の地理は、大きな国の面積について学習したような感じだったと思う(低学年時のこと)。高学年時はその国の特徴をおさえた授業だったと思う。 |
| | 106 | 先生が問題を出し、手を上げて答える。覚えられるし、楽しく授業ができる。(首都当てクイズなど。全般にわたってのクイズ) |
| | 116 | 色々な国の首都を答えること。 |

## 第16表　中学校時代に記憶に残る外国に関する地理授業

| 地域 | No. | 授業内容・方法 |
|---|---|---|
| アメリカ | 1 | アメリカの人々が日本の製品を壊しているという資料集の写真が印象に残っています。 |
| | 8 | 工業、農業、気候、資源、地形　地図を書いて、そこに色分けしながら書き込む。 |
| | 11 | 農業について地図を使って習った。 |
| | 14 | 山脈の名前や重要都市。なかなか前に進まない授業ではあったが、先生が雑談をまじえながらする授業がけっこうおもしろかった。 |
| | 16 | さまざまな産業の発達している地域のようすを地図で説明したり、穴埋め式のプリントなどで進めた。 |
| | 18 | 地名などの授業で大きな地図を黒板の横にかけて、それを見て授業をしていた。 |
| | 22 | 工業地域。 |
| | 34 | 地域ごとの工業の特色・農業・気候。 |
| | 35 | 工業・農業や戦争について。ビデオを1カ月に2～3回見て簡そうを書いた。先生がいろんな話をしてくれた。 |
| | 53 | まず最初に川や山などを地図で色分けなどをした。先生はユニークに最近のことをおりまぜながらやっていた。 |
| | 56 | 都市と農業地域。地図帳を片手に位置を確認し、先生が説明した。 |
| | 66 | 農産物の生産地の地図がわかりやすく書かれていた。 |
| | 82 | 大きなアメリカの地図を書き、土地ごとに産業分布が一目でわかり印象的であった。 |
| | 112 | 農業を地図に色分けした。 |
| ヨーロッパ | 2 | 農業、工業、国ごとにまとめてやった。 |
| | 9 | ドイツのルール工業地帯 |
| | 21 | 大事な事柄は色分けなどしながら板書、生徒に対する質問、雑談を交えて進める。またビデオなども使用。 |
| | 39 | ヨーロッパ諸国についての学習で、どの国ではどんなものがつくられているかなど。生産高に順位をつけてあるのを覚えて国の特色みたいなものとして勉強した。 |
| | 45 | イギリスの気候について。スライドをみたり、図書館からの本によって理解しようとした。 |
| | 49 | 産業や鉱産物についてやったこと。 |
| | 65 | ライン川流域の工場地域について、原料はどこから入ってきて、製品は川を使ってどこまで運んでいくかなどを地図を使って説明した。 |
| | 70 | ライン川流域の工業発展。 |
| | 88 | その地域特有の地形、自然現象。 |
| | 113 | 工業より生活様式の方が興味をもった。 |
| | 118 | プリント学習のあとに工業についてのビデオを見た。週1回ぐらいビデオを見せてもらった。 |
| | 119 | 一人一人がある国や地方について、調べてまとめ発表した。 |
| 中国 | 22 | 農業、ビデオを見た。 |
| | 23 | 農業工業ー地名がまぎらわしく、覚えるのが大変、とにかく地図をかいて覚えた。 |
| | 26 | 工業など。プリントをくばって色をぬったりした。 |
| | 71 | 農・工業で、主要な鉄山、炭田、農業区分の地図を多く扱った。 |
| | 87 | 農業地帯：大豆・小麦・米などの農産物の分布 |
| | 89 | 大きな地図をもってきて地形を説明していた。先生が中国の帽子をかぶって「ニイハオ」といった。 |
| | 101 | 何回も行ったことのある先生の話だったので、中国のことが多かった。人々のくらし方だけを聞くだけだった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 世界全体 | 4 | 世界の気候。何度もくどいほどおしえられた。 |
| | 7 | 世界気候。対象:全域　進め方:地図を書き、色の塗り分け、赤道の位置など基本的なことの確認。 |
| | 13 | その国の場所を地図で示したり、輸出品などを、実際に先生がもってきたこと。例えば綿花や羊毛、硬貨本など。 |
| | 19 | 雨温図という呼び方をしつこく教えられた。 |
| | 20 | 気候の授業で地中海沿岸を習った時に作物と比較しながら進めた。 |
| | 32 | 世界の国々について幅広く学び、その国々の農産物、鉱産物、地域による気候の違いなどを詳しく覚えなければならなかった。 |
| | 44 | 授業をはじめる前にいつも前の授業でやったことの内容を5問くらいテストしたこと。一つの地域ごとにまとめて黒板に書いてくれたのでノートをまとめやすかったし、授業もわかり安かった。 |
| | 46 | 先生が黒板にいっぱい書いて、生徒がうつすだけという授業。 |
| | 48 | 用語をおぼえさせるために、毎時間みんなの前で、地図で、その場所を示させた。気候。地域差による住居の違い。 |
| | 52 | 地形の授業。プリントの空欄を地図帳をみて埋めていく。 |
| | 57 | 輸出・輸入とか。国はけっこう有名な国ばかり。 |
| | 60 | 黒板に内容を書く時、語句をみんな矢印でつなげてあまりよくわからなかった。 |
| | 68 | 世界の工業や、油田、岩石、鉄鉱石のおもな産地など。 |
| | 76 | いろいろな地域国でのあいさつ。実際、外国でそのあいさつを使ってみた人の経験の話をしてくれた。 |
| | 78 | とてもたのしかった。 |
| | 84 | 教科書の太字を中心に黒板に内容をまとめ、その時々に旅行の時の食べ物とかを教えてくれた。 |
| | 91 | 重要な地名などに印をつけたりした。 |
| | 92 | 各国の山脈などを覚えるのが好きだった。地図帳をながめるのが好きだった。 |
| | 93 | 地図をかかげて、黒板に教科書で重要な事柄を書く。 |
| | 96 | プリントを配って、それに色を塗ったり、書き込みをしたりして授業を進めていた。字を書いたというより、表やグラフや図をたくさん書いた記憶がある。 |
| | 97 | 民族文化について。日本と全く異なる生活習慣など。 |
| | 110 | プリントを配られて、同じ気候の所に色を塗る作業があった。穴埋め式のプリントで、個人で調べて書く授業があり、力がついた。 |
| | 115 | 全世界:地図を白紙にうつし、地形、位置を確認。グラフなどを読みとり、箇条書きで抜き出す。 |

## 第 17 表 高等学校受験期に得意とした地理分野の外国名とその理由

| 地域 | No. | 授業内容・方法 |
|---|---|---|
| | 1 | 工業と農業:覚えるのが楽しかった。 |
| ア | 2 | 興味があったから。 |
| | 4 | 農業、適地適作のところ:細かい部分まで何度もおしえてくれた。 |
| メ | 6 | 特産物や工業製品:耳慣れた都市が多いこと。都市ごとの役割がはっきりしている。 |
| | 8 | 農業、よく問題にでていたから。 |
| リ | 10 | 工業・地形:何となく。 |
| | 11 | 農業分布や工業分布:地図を自分で作って楽しみながらできたから。 |
| カ | 15 | 生産物の地域分布:比較的に覚えやすかったから。試験にも出るとおもい、得意にしたから。 |
| | 16 | 産業など:いろいろな特徴のあるものがあって、覚えるのが楽しかったから。 |
| | 22 | 工業や農業:好きだったし覚えやすかった。ソ連:農業:覚えやすかった。 |
| | 23 | 農業と気候、アメリカという国が日本ととても、かかわりあいがあることに気づき、興味をもった。 |
| | 25 | 広大な土地で地域によって、気候や農作物のちがいが変化に富んでいてよかった。 |
| | 26 | 主な産業や地形:ここを重点的に学習した。 |
| | 28 | 農業・工業の分布:都市などを覚えるのが得意だったから。 |
| | 32 | 農業地域や工業地域:興味のある国だったから、一番勉強しやすかった。 |
| | 34 | 農産物・鉱産物で知られる地域を覚えている:重要であると何となくわかるし、都市名と産物を結びつけて覚えていたから。 |
| | 36 | 工業の種類・農業、もともとアメリカは勉強しやすい教科だったから。 |
| | 40 | 地形に関すること、特産物(農業と工業):興味があり、実際、内容を先生がわかりやすく説明してくれたから。 |
| | 41 | 産業・地形。アメリカはその頃、何となくスゴイ国でこれから重要だと思ったから。 |
| | 42 | 興味があったの楽しくやれたので。 |
| | 45 | 農業、アメリカが好きだから。 |
| | 46 | 農業と工業:一つの国なのに全くちがう気候であったりして、オレンジができたり、小麦が春と冬につくれたりととても不思議だったから。 |
| | 50 | 立地条件が、本当によくでてきていると思ったから。 |
| | 52 | 工業:有名な地名が多かったから。 |
| | 54 | (中国)とアメリカの産業、受験の2大中心はここだと思ったから。 |
| | 56 | 気候・作物・工業都市:興味のある国だったから、"日本～"とよく言われるように日本と関わりの深い国のようだったので興味があった。 |
| | 58 | 地図上での農業分布など土地の名:授業のときその国の形を描いてそこに自分で分布を描いたりしたからだと思う。 |
| | 60 | 工業都市と農業地域:絶対受験に出ると思っていたので、たくさん勉強したから。 |
| | 70 | 農業地域:春小麦、冬小麦の位置とか、よく問題に出ていたから。 |
| | 71 | 農業や工業:そのとき結構まじめに勉強したから。 |
| | 74 | 工業・農業:南北によって、全く違った農業をやっているから。 |
| | 76 | 工業区分、五大湖を中心に、工業国アメリカを写真などと理解したから。 |

| | | |
|---|---|---|
| | 77 | アメリカ:地形:日本との結びつきが深く、その頃自分にとって受け入れやすい国だったので。 |
| | 81 | 地名。 |
| | 82 | 工業・農業:日本の最大の貿易相手国であるので、ニュースなどで予備知識があったから、勉強しやすかったため。 |
| | 86 | 工業地帯や農業地帯など:聞いたことのある地名などが多かったから。 |
| | 87 | 都市の工業の特徴の問題:小さい頃から興味があったから。 |
| | 88 | 工業地域:その当時はなんとなく覚えやすかったから。 |
| | 95 | 内容が比較的に詳しく説明されている。 |
| | 97 | 気候・農業区分:内容が大事だときたから。 |
| | 101 | 農業・大都市:いつか行ってみたいという気持ちがあるので行ったときに役立つようにと考えていた。 |
| | 103 | 五大湖周辺の工業・農業地帯:覚えやすかったから。 |
| | 106 | いろいろ:重要そうだったからたくさんやった。 |
| | 107 | 農業の区分け・地形、知っている都市の名前が多く、興味をもてて学習できたから。 |
| | 108 | 工業・産業・農業など:好きだったから。 |
| | 111 | 地形・農作物:諸外国の中で、1番身近に感じることのできる国に1つだから。 |
| | 114 | 工業:覚えやすかった気がするし、アメリカに興味があったから。 |
| | 115 | 工業・農業の分布など:分布がはっきりとわかれていたので、図を書いて覚えやすかった。 |

| | | |
|---|---|---|
| ヨーロッパ | 9 | 山脈・川などの地形、気候：定期テストのときおぼえたのを忘れてなかったから。 |
| | 10 | 気候・地形・貿易など：何となくすきだった。 |
| | 12 | 気候や農業：覚えやすかったから。 |
| | 14 | 西欧諸国、農業や工業都市など。西欧諸国はその当時、西欧を舞台にしたマンガ、本などの影響をうけて自分で地図をひろげたりしていたので自然に得意になっていた。 |
| | 18 | 特産物：一つの国に1、2こ覚えていただけで、けっこう点数がとれたから。 |
| | 20 | 西ヨーロッパ。すべて好きだったから。 |
| | 21 | EC諸国：気候、産業について：その国々によって気候や産業の特色が違うため覚えやすかった。主な農業や地形：それぞれの国の特色がはっきりしていてわかりやすかった。 |
| | 25 | 農業・工業の分布：都市などを覚えるのが得意だったから。 |
| | 26 | 気候・農業：気候によって作るものが違うのでけっこう楽しかったから。 |
| | 34 | 地形に関すること、ヨーロッパ全体のつながりのこと。ヨーロッパに興味があり、自分でもいろいろ調べたから。 |
| | 36 | つくっている作物の特色を国別にあげる。ヨーロッパはなんとなく好きな国が多いのでアメリカやアジアより勉強内容を覚えやすかった。 |
| | 39 | 覚えることが少ない。 |
| | 42 | 西ヨーロッパ：各国の中心産業、ECなどの共同体：西ヨーロッパは有名な国が多かった。新聞やニュースにも話題になっていた。 |
| | 43 | 南ヨーロッパ：作物・雨温図：雨温図が他と比べて特別違ったものだったから。 |
| | 52 | 地図上での農業分布など土地の名：授業のときその国の形を描いてそこに自分で分布を描いたりしたからだと思う。 |
| | 54 | ECについて、工業地域、海流：問題集や模試に出たりよくしたから。 |
| | 58 | 農業や工業：そのとき結構まじめに勉強したから。 |
| | 63 | 工業など。得意というわけではないが、ECなどがあったし、受験には必要だ強く思っていたので、勉強した。 |
| | 65 | 農業や工業について：北方の国では、工業がさかんで南方の国では農業がさかんというように国によって特色がはっきりしている地域だから。 |
| | 70 | 農業や工業について。北方の国では、工業がさかんで南方の国では農業がさかんというように国によって特色がはっきりしている地域だから。 |
| | 71 | 工業・農業：仏は農業、独は工業と決まった国があったから。 |
| | 76 | 風土と産業：外国の中でもヨーロッパに興味があったため、しらずのうちに得意になっていた。 |
| | 78 | 気候・工業：細かかったがかなり勉強したので知らないうちに得意になった。 |
| | 81 | 工業・農業、地名。 |
| | 85 | 農業や工業：地理の先生から、ヨーロッパを旅行した時の話をきいておもしろいと思ったから。 |
| | 86 | 農業の特徴など：必ず受験に出ると思ったから。 |
| | 88 | 地形・自然現象：中1の時にがんばって勉強したから。 |
| | 94 | 地形・工業など：興味があったのでやれば点がとれると思ったので。 |
| | 95 | 各国の比較が面白い。 |
| | 96 | 北欧の地形など：あまり日本では北欧事情が知られていなくて、大変興味があるから。 |
| | 98 | 地形・工業：ヨーロッパに興味があったから。 |
| | 109 | EC。他地域と比べて覚えられた。 |
| | 111 | 地形・鉱産物：日常の中で見たりきいたりする機会が多いために、全く知らない国よりもイメージをつくりやすいから。 |
| | 113 | 工業・農産物・地形など。おもしろかったから。 |

| | | |
|---|---|---|
| オーストラリア | 2 | 行ってみたかったから。 |
| | 8 | 資源について、西部と東部で資源が分かれていてわかりやすかったし、自分の国との関係もつよかったから。 |
| | 28 | 農業地域や工業地域:興味のある国だったから、一番勉強しやすかった。 |
| | 30 | 石油と石炭が大陸の両端にある:覚えるのが少なくて簡単だったから。 |
| | 31 | 農業・工業の特徴や地名:興味があったから。 |
| | 40 | 地形や産業。もともとオーストラリアが好きだったから。地形の名前が何となくかっこよくて、勉強してて楽しかった。 |
| | 53 | 特に地名と気候区分:なんとなく覚えやすかった。 |
| | 56 | 都市と資源、産業:特徴があったので覚えやすかった。 |
| | 57 | 資源、輸出品:その時いちばん行きたかったから。 |
| | 74 | 工業・農業:一つの孤立したような国だったから。 |
| | 79 | 一度行ってみたい国だったから。 |
| | 89 | どのような地下資源があるか:あるひとつの大きな島のようだったから地形や土地の名前がおぼえやすかった。 |
| | 91 | 工業・気候など。単にオーストラリアが好きだったから。あとは比較的覚えやすかったから。 |
| | 97 | 自然条件などおぼえやすかったから。 |
| | 98 | 工業・農業:覚えやすかったから。 |
| | 100 | 資源:西と東に分けて覚えることができたから。 |
| | 101 | 地形など:一番行ってみたい所だから興味があった。 |
| | 110 | 特に興味があった。 |
| | 119 | 石炭・鉄鉱石の分布、気候・山脈などの名前:覚えやすかったから。 |
| 中国 | 1 | 沿岸の工業都市。中国は日本と関係している工業都市が多かったので覚えやすかった。 |
| | 5 | 工業地区の分布:たくさんあるけど暗記しまくった。 |
| | 31 | 農業・工業の特徴や地名:興味があったから。 |
| | 33 | 農業・工業:地名は覚えやすかったし、自己流で、分布図を覚えられたから。 |
| | 45 | 社会情勢、農業:「一人っ子政策」などの特別な日本にはない制度に興味をもてたから。黄河流域の肥沃な地域における農業方法。 |
| | 50 | 中国(とアメリカ)の産業、受験の2大中心はここだと思ったから。 |
| | 53 | 特に農業区分:東北・華北・華南の4つに分けてそれぞれの特色をおさえたからでしょう。 |
| | 57 | 農業:地域が分かれていたから(稲作、畑作)。 |
| | 72 | 米や麦、工業原料の産地:華北、華中、華南などにはっきり別れていておぼえやすかった。 |
| | 77 | 工業分布:しつこくやった覚えがある。 |
| | 87 | 農産物の分布:授業で覚えていたから。 |
| | 92 | 地名・地方の特色:同じアジアでしかも人口が世界一の国だから興味があった。 |
| | 100 | 農作物の生産:地域ごとの生産物の違いがはっきりしていたから。 |
| | 103 | 工業地域・農業の特色:覚えやすかったから。 |
| | 113 | 工業・農産物:特徴があってわかりやすかった気がする。 |
| | 117 | 輸出入に関するグラフ、農業:ワンパターンだから。 |

## 第4節　大陸における構成国の位置認知の傾向から

ここでは、第18表をもとに検討する。

アジアにおける構成国の正答率は、東アジアの国、国土面積が大きな国、島国などの特徴をもつ国が高く、一方、日本から遠方の国、小島国、西アジアの内陸で国土面積の小さな国などの特徴をもつ国は、低い結果となった。このことから、日本との近接度、国土面積の大きさによる視野への入りやすさ、島嶼国家の視野への印象の強さなどによる位置認知への影響が考えられる。

次に、ヨーロッパにおける構成国の正答率は、イギリス、フランス、イタリア、ドイツが高く、それら国々が日本と深く交流している先進国であることが、その主な要因として考えられる。また、イギリス、アイスランドは島国であること、フランスやドイツは内陸ではあるが国土面積が大きいこと、イタリアは特徴的な半島部とあること、スペインとポルトガルは面積の大きいイベリア半島の2つしかない国であることなど、その視覚的な特徴からもたらされる位置認知への影響も考えられる。一方、正答率が低かった国は、内陸で国土面積の小さい国である。したがって、ヨーロッパにおける構成国の位置認知の場合、正答率の高い結果となった、海洋沿いの北・西・南ヨーロッパ国に対して、正答率の低い結果となった、内陸の東・中央ヨーロッパ国に、2極化しているように捉えられる。

また、南アメリカにおける構成国の正答率は、ブラジル、チリ、アルゼンチンが高く、ガイアナが最も低く、概ねアジアやヨーロッパと同様な要因が考えられる。

総じて、複数の大陸における構成国に対する位置認知の傾向は、国土面積、日本との距離、特徴的形状、半島部、内陸国などの特徴をもつ国が、視覚的に捉えやすい国としてイメージ形成に関わっていることが考えられる。つまり、これまでみてきた、世界イメージ形成の中心となっている欧米、中国、オーストラリアは、それらの要因に該当する特徴を持ち、この点からも、これらの国々が、イメージの中心となっていることを説明することができる。

## 第 18 表　大陸における構成国の位置認知

| m:平均値<br>s:標準偏差 | アジア<br>m: 0.435<br>s: 0.331 | 正答平均 | ヨーロッパ<br>m:0.408<br>s:0.319 | 正答平均 | 南アメリカ<br>m:0.466<br>s:0.310 | 正答平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (m + s)≦ | 日本 | 1.000 | イギリス | 0.976 | ブラジル | 0.976 |
| | 中国 | 1.000 | フランス | 0.959 | チリ | 0.919 |
| | インド | 0.984 | イタリア | 0.951 | アルゼンチン | 0.878 |
| | 韓国 | 0.927 | スペイン | 0.902 | | |
| | 北朝鮮 | 0.927 | ドイツ | 0.894 | | |
| | モンゴル | 0.911 | アイスランド | 0.886 | | |
| | インドネシア | 0.829 | ポルトガル | 0.846 | | |
| | スリランカ | 0.772 | | | | |
| <(m + s)<br>(m + s/2)≦ | フィリピン | 0.748 | アイルランド | 0.707 | | |
| | サウジアラビア | 0.740 | スイス | 0.675 | | |
| | タイ | 0.634 | ギリシア | 0.659 | | |
| | | | デンマーク | 0.642 | | |
| | | | ノルウェー | 0.634 | | |
| | | | スウェーデン | 0.602 | | |
| | | | フィンランド | 0.577 | | |
| <(m+ s/2)<br>m≦ | シンガポール | 0.585 | オランダ | 0.545 | ペルー | 0.577 |
| | トルコ | 0.569 | ポーランド | 0.496 | ベネズエラ | 0.545 |
| | ベトナム | 0.553 | | | | |
| | ネパール | 0.545 | | | | |
| | マレーシア | 0.537 | | | | |
| | イラク | 0.528 | | | | |
| | イラン | 0.463 | | | | |
| | パキスタン | 0.439 | | | | |
| <m<br>(m - s/2)≦ | クウェート | 0.398 | オーストリア | 0.407 | コロンビア | 0.366 |
| | ミャンマー | 0.374 | ベルギー | 0.407 | ボリビア | 0.366 |
| | バングラディシュ | 0.350 | ラトビア | 0.390 | | |
| | ブータン | 0.285 | リトアニア | 0.374 | | |
| | | | ルクセンブルク | 0.325 | | |
| | | | エストニア | 0.285 | | |
| <(m -s/2)<br>- s≦ | アフガニスタン | 0.220 | スロバキア | 0.187 | パラグアイ | 0.276 |
| | カンボジア | 0.220 | マケドニア | 0.154 | スリナム | 0.195 |
| | オマーン | 0.138 | バチカン | 0.146 | ウルグアイ | 0.179 |
| | シリア | 0.130 | ルーマニア | 0.146 | エクアドル | 0.163 |
| | ブルネイ | 0.130 | ボスニア | 0.138 | | |
| | ラオス | 0.106 | アンドラ | 0.130 | | |
| | | | チェコ | 0.130 | | |
| | | | ハンガリー | 0.114 | | |
| | | | ユーゴ | 0.114 | | |
| | | | モナコ | 0.106 | | |
| | | | ブルガリア | 0.098 | | |
| <(m - s) | イスラエル | 0.089 | クロアチア | 0.065 | ガイアナ | 0.154 |
| | キプロス | 0.089 | リヒテンシュタイン | 0.065 | | |
| | カタール | 0.073 | サンマルコ | 0.057 | | |
| | モルジブ | 0.065 | スロベニア | 0.057 | | |
| | イエメン | 0.057 | アルバニア | 0.049 | | |
| | ヨルダン | 0.057 | マルタ | 0.024 | | |
| | アラブ首長国 | 0.041 | | | | |
| | レバノン | 0.016 | | | | |
| | バーレーン | 0.000 | | | | |

＊国名と位置が正答した場合は1点とし、不正答場合は0点とする。
被験者の正答得点の平均値が、本表の正答平均の値となる。

## 第5節　まとめ

本章の主な結果は以下のとおりである。

前章の象徴要素の結果を反映している、本章での「詳しく知っている国」と「行きたい国」の結果は、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国、中国が、それぞれ上位の国となり、概ね被験者に共通する傾向となる。このことは、主にTVを中心とするマスメディアからの影響によって、短期的な話題情報はともかく、それらの国々に関する日常的で多くの情報が流通していることによるものとして考えられる。同様に、社会科関連以外の教科や科目についても、英語を主に使用する国（アメリカ、イギリス、オーストラリアなど）や、漢字と通じた中国文化についての情報が無意識的に流通していることからも考えられる。さらに、家族の旅行経験における行き先が、やはり、欧米、近隣アジア諸国、オーストラリアとなり、その主な目的が観光であった。つまり、このことは、被験者の「行きたい国」の主な理由と一致し、観光は被験者に好意的な興味・関心を引き起こし、被験者のイメージ形成に能動的に関わり、大きな影響を及ぼしている。そして、被験者の記憶に残る地理学習でも、これまでの分析結果の傾向と同様に、欧米、中国、オーストラリアが顕著な国となった。つまり、被験者には、その国の内容はともかく、単に、世界の国々に関する順序立てが潜在的に形成されており、それが地理的認識の評価の尺度となって、世界イメージ形成に働きかけていることが考えられる。加えて、位置認知の結果からは、国土面積、日本との距離、特徴的形状、半島部、内陸国などの視覚的に捉えられるイメージ形成の要因が考えられたが、やはり、世界イメージの中心となる欧米、中国、オーストラリアは、そのような視覚的にイメージ形成しやすい特徴をもち、このことからも、それらの国々が顕著となる理由を説明することができる。

### 註－第5章－

1）質問内容、前章のSD法の評定対象の国家に対して「あなた自身が、特に詳しく知っている（知っていない）と思っている国を、上の 15 の国の中から2つあげ、特にどのような部分で、どうしてなのか理由をそれぞれ述べて下さい」。

2）質問内容「現在、どこの国に行ってみたいか。最も行きたい順に3つあげなさい。また、その理由について述べて下さい」。

3）質問内容「雑誌（本）・TVなどから得た情報の中から、現在、あなたは、特にどの外国の国・地域に、強く興味や関心をもっていますか。情報源を記しながら、関心の度合いの強い方から3つあげなさい。また、その国・地域のどのようなことについて、興味・関心を持っているのか述べて下さい」。

4）質問内容「ここ5年間に、あなた以外の家族のいずれかが、外国に行ったことがありますか。あるならばその国名を全てあげて下さい。またそれぞれ何年前か、何日間か、どのような目的か、それぞれ述べて下さい」・「あなた以外の家族のいずれかに外国への旅行経験があるならば、それによってあなたが受けた興味・関心・影響などについて述べて下さい」。

5）質問内容「あなた自身が、あなたが住んでいる市町村・地区・町内との直接的な関係で、強く外国のものごとと関わる出来事があったならば述べて下さい。またあるならば、どのような影響を受けたか述べて下さい」。

6）姉妹都市によるスポーツ・文化交流、近隣に住んでいる外国人などの回答が得られたが、総回答数が被験者の1割にも満たないため、イメージ形成に大きな影響を与えていないと判断した。

7）質問内容「中学校・高校を通して、社会科や地理歴史科・公民科の授業以外の、他教科や部活動などの学校での活動の中で、強く外国への興味や関心を持ったものごとがあれば述べて下さい」。

8）質問内容「小学生時代の社会科地理分野の授業の中で、特に印象に残っている外国に関する授業はどんなものであったか、地域・国をあげ、その内容やその時の授業の進め方・やり方などについて述べて下さい」。

9）質問内容「中学生時代の社会科地理分野の授業の中で、特に印象に残っている外国に関する授業はどんなものであったか、地域・国をあげ、その内容やその時の授業の進め方・やり方などについて述べて下さい」。

10）質問内容「高校受験を強く意識した学習、いわゆる「受験勉強」の中で、いちばん得意だった国・地域とその内容を2つあげて下さい。また、その理由についても述べて下さい」。

11）予備調査を 1995 年 12 月下旬に 40 の被験者に対して行い、本調査は 1996 年 1 月下旬に実施した。

12）アジアと南アメリカはランベルト正積方位図法、ヨーロッパは多円錐図法の白地図を使用した。

13）予備調査は行わず、本調査を 1996 年 2 月中旬に実施した。

# 終 章　本研究の結論

本研究の目的は、理論と実践を結びつけることのできる、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発すること、また、高校生の大陸・国家に対するイメージやその形成要因を解明していくことによって、地理授業における世界イメージ形成のための方策を導き出すこと、そして最後に、その方策に留意した、その学習指導システムの活用について提示することであった。その各章の結果は次のとおりとなった。

第2章では、地理的見方・考え方を中心におき、それと関係する地理的技能や地理的イメージなどの諸概念との明瞭な構造化を図り、授業実践に結びつく、地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システム(「地理的見方・考え方の学習指導システム」)を開発した。そして、それに基づいて、学習内容の構造化を図り、地理的見方・考え方を育成する高等学校地理授業を設計した。その詳細は次の2つにまとめられる。

(1)地理学との関連が図られる地理的事象から、地理的見方・考え方の「地理的・・」を規定し、その地理的事象を構造化した。そして、地理的見方・考え方の区分による構造化とキー概念の抽出によるその明瞭化を図り、地理的見方・考え方の内部構成と構造化を図った。その構造化に対応する地理的技能、地理的認識、社会的見方・考え方などの関係諸概念を構造化し、さらに、社会的見方・考え方や地理的見方・考え方から構造化される、「社会的判断力」や「地理的判断力」という新たな概念を投入することによって、地理的見方・考え方と、社会認識および公民的資質とに理論的な整合性を持たせ、明瞭に構造化した。

(2)以上の結果となる地理的見方・考え方とその関係諸概念の構造を総合的な観点から独創的に組み合わせ、「地理的見方・考え方のシステム」を開発した。そして、構造化された地理的見方・考え方や地理的判断力に基づいて教科書の記述内容を分析し、それから学習内容の構造化を行った。さらに、その結果に一般資料も加え、開発した学習指導システムに基づきながら学習指導計画案を作成した。

第3章では、前章で開発した「地理的見方・考え方の学習指導システム」を用いて、地理的見方・考え方の育成を中心におき、それを助ける地理的技能の育成を重視した社会科地理授業のための学習指導システム(「地理的技能の学習指導システム」)を開発した。また、その「地理的

技能の学習指導システム」を、いくつかの学習指導計画から分析することを通して、その有効性を検証し、さらに、それに基づき、学習内容の構造化を図り、地理的技能の育成を重視した中等社会科地理授業を設計した。つまり、本章では、地理的技能に関する理論的な論点を踏まえて、前章と同様に、学習指導領域まで見通した学習指導計画案を作成した。その詳細は次の2つにまとめられる。

(1)「地理的見方・考え方の学習指導システム」をもとに、新たに地理的技能に関する詳細な探究過程を組み込み、「地理的技能の学習指導システム」を開発した。そして、その「地理的技能の学習指導システム」の有効性について検証した。

(2)「新潟県津南町の電子工業」を学習テーマとして取り上げ、筆者自身による野外調査から得られた地理的事象を、地理的見方・考え方と地理的判断力のキー概念より分析した。そして、これによって得られた内容を、「地理的技能の学習指導システム」に従って、学習内容として構造化した。そして、構造化された学習内容に基づいて、学習目標を設定し、検討された授業づくりへの視点を組み込み、本研究が求める理念型としての中等社会科地理授業のための学習指導計画案を設計した。

第4章では、高校生がもつ世界における複数の大陸・国家に対するイメージについて、SD法と自由連想法を用いて、認知的側面と情意的側面の関係を中心にしてその全体像を明らかにした。さらに、各大陸・国家のイメージの主要な内容について明らかにした。その詳細は次のようにまとめられる。

認知的イメージにおけるいくつかの評価には、実際の地理的事象とのズレが所々みられた。その原因には、近接する国家や所属する大陸の特徴が強く反映される場合や、関係する既存の知識が不足し、詳細に評価できない場合が考えられた。また、情意的イメージの3つの因子は、オズグッドの主張と同様な「評価」、「勢力」、「活動」と概ね解釈することができた。そして、認知的・情意的イメージの因子間には4つの相関がみられ、これにより、認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像が明らかにされた。さらに、各大陸・国家のイメージの主要な内容の多くを明らかにし、それを反映する被験者の認識について考察した。その結果、その内容の多くは、情報流通上のフィルターとなる学校教育の教科書やマスメディアの影響を受けた情報が、強く反映されたものであると考えられた。

第5章では、大陸・国家に対するイメージ形成に影響を及ぼす要因を追究していくために、別

のアンケート調査の結果から検討し、その要因を明らかにした。その詳細は次のようにまとめられる。

「詳しく知っている国」と「行きたい国」の結果は、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国、中国が、それぞれ上位の国となり、概ね被験者に共通する傾向となった。これには、まず、日常的で多くの情報をもたらす、主にTVからの影響が考えられた。また、社会科関連以外の教科・科目からも同様に、無意識的な情報による影響が考えられた。家族の旅行経験での行き先でもやはり、欧米、近隣アジア諸国、オーストラリアが顕著となり、その主な目的が観光であることも含めて、「行きたい国」の結果とほぼ一致する結果となった。つまり、観光は被験者に好意的な興味・関心を引き起こし、被験者のイメージ形成に能動的に関わり、大きな影響を及ぼす行動であると考えられた。被験者の記憶に残る地理学習でも同様の国々が顕著となった。以上から、被験者には、その国の内容はともかく、単に、世界の国々に関する順序立てが潜在的に形成されており、それが地理的認識の評価尺度となって、世界イメージ形成に働きかけていると考えられた。加えて、位置認知の結果からも、それらの国々が世界イメージ形成において顕著となる理由について説明することができた。

総じて、本研究の結論は以下のように提示する。

まず、第2章と第3章の結果から、基礎となる「地理的見方・考え方の学習指導システム」と、その応用となる「地理的技能の学習指導システム」を合わせて、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発した。すなわち、この学習指導システムに従って、授業設計を行い、数度にわたって授業実践してゆけば、学習成果となる地理的認識と地理的判断力、とくに、地理的見方・考え方、地理的判断力、地理的技能に関する学力の深まりが、より系統的かつ計画的に図られてゆくことになる。そして、この学習指導システムの活用の手順は、改めて第19表（左側）から示し、また、本学習指導システムの全体像は、改めて第9図から示しておくことにする。

次に、第4章と第5章の結果から、高校生の大陸・国家に対するイメージやその形成要因を明らかにした。そして、この結果から、地理授業における世界イメージ形成のための方策を、以下のように2つ導き出した。

（1）第4章の結果から、教科書やマスメディアの影響を強く受ける各大陸・国家のイメージの主要な内容の多くは、各大陸・国家の地方的特殊性に強く関わるものである場合が多い。つまり、そのようなイメージは、地方的特殊性の捉え方とも強く関わり、その捉え方次第で、その地

域に対する「評価」の良くない象徴要素の強化に成りかねない恐れがある。例えば、第4章の結果では、サウジアラビアの地方的特殊性→砂漠気候→住み難い→良くない「評価」→嫌い、といった構図が思い描ける。このような構図の全てが否定されるものでもないが、一方でそれ以外の地理的事象から、例えば、スポーツ、食文化、イベント、観光などから、良い「評価」へ、その結果が「好き」、といった構図も描けるはずである。何を標準とするのかは困難となるが、少なくとも、地球市民的な平和・人権・平等・共存などを念頭におき、そのような情意的イメージの「評価」に直接的につながりやすい部分への地理的事象の取り上げに際しては十分に留意すべきである。

(2)第5章の結果から、世界イメージ形成は、欧米、オーストラリア、中国を中心にして順序立てながら潜在的にイメージが形成されている。つまり、それは、世界イメージ形成を規定してゆく、地理的認識の評価尺度となっていることが考えられる。したがって、このような尺度のもとで、アメリカ、フランス・ドイツ・イタリアなどのヨーロッパ諸国、オーストラリア、中国などを、中学校や高等学校の地理授業における事例学習の中心にしながら、世界イメージ形成を図ってゆく場合、アフリカ、東南アジア、南アジア、西アジア、ロシアとその周辺、南アメリカなどの構成国のイメージは、豊富な意味を持たずに、欠落している恐れが高い。そこで、この恐れのある国々に対して、それらのイメージの中心となる国々や、日本との関係から積極的に取り上げてみてゆくことによって、世界イメージ形成のための授業構成を図ってゆくべきであろう。つまり、生徒の興味・関心や地理的認識の積み上げや深まりに留意しながらも、本研究の冒頭において岩田(2000)が指摘しているように、わが国の国際社会における社会・経済的な位置づけや、わが国の文化アイデンティティーからして必要な地理的事象を保障し、基礎・基本となる世界イメージ形成を図ってゆく必要がある。

さらに、以上の2つの方策を細かくみることによって、以下の5つの留意点を導き出した。

①イメージが欠落する恐れがある国々について、世界イメージの中心となる欧米、オーストラリア、中国、そして日本などと関係づけて捉えることのできる地理的事象に着目し、積極的に取り上げてゆく(「欠落しやすい国々への関係づけと取り上げ」)。

②各大陸・国家に対するイメージを代表する象徴要素が、その大陸・国家の地方的特殊性となって、情意的側面に結びつく評価へ、どのように影響してゆくのかという観点から、学習内容となる地理的事象を吟味する(「象徴要素による情意的側面への影響」)。

③世界イメージ形成の中心となる国々のイメージが、欠落しやすいイメージとなる国々のイメージに対して、どのような影響を及ぼすのかについて留意する(「世界イメージの中心となる国々

の影響」)。

④教科書記述やマスメディアなどの影響によって、世界イメージ形成のもとになる地理的事象が歪んでいたり、偏っていたり、著しく古いものであったり、刷新してゆく必要があるのか、などについて留意する(「地理的事象の事実性・平等性」)。

⑤とくに事例学習を通した基礎・基本となる世界イメージ形成のための授業展開を、年間授業計画の中で、その全体を踏まえて構成しておく必要がある(「事例地域の計画的な取り上げ」)。

以上から、最後に、本研究で開発した、その学習システムの活用と、世界的イメージ形成のための方策の対応関係は、まず第19表からみることができる。そして、その対応が図られる段階は、<1>、<2>と<4>の3つの段階であり、それらを以下のように説明する。

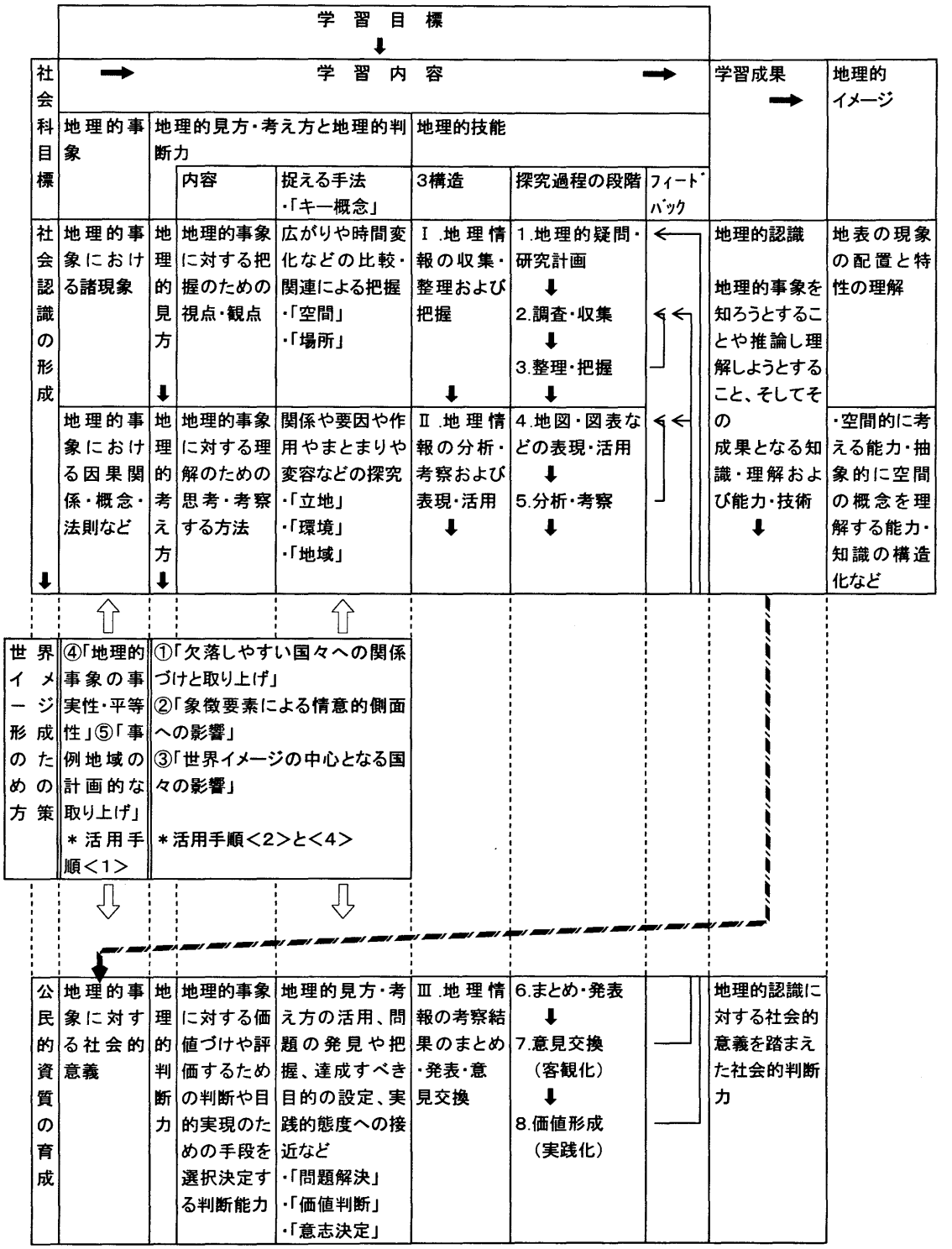
<1>では、基礎・基本となる世界イメージ形成を図ろうとする年間授業計画において、各単元の学習目標に従って、事例となる国に関する地理的事象を広く収集し選定する際に、それが歪んでいたり、偏っていたり、著しく古いものであったり、刷新する必要があるかなどについて検討し、そのような地理的事象を取捨選択する。

<2>と<4>では、世界イメージの中心となる国を事例として取り上げる場合、イメージが欠落しやすい国との関係を重視して、そのような地理的事象を取り上げたり、その世界イメージの中心となる国のイメージが、欠落しやすい国や取り上げない隣国のイメージに、どのような影響を及ぼすのか吟味する。また、取り上げる地理的事象が、その国の代表的な象徴要素となるのものであり、地方的特殊性と捉えられる場合、それが固定観念の強化につながったり、公民的資質に反する、不平等なマイナス・イメージとなって、情意的側面に強く働きかけないかについて吟味する。

加えて、第9図より、本研究で開発した、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムと、世界イメージ形成のための方策の対応から説明しておきたい。第9図は、「地理的見方・考え方の学習指導システム」と「地理的技能の学習指導システム」を整理しまとめたものである。つまり、本研究のねらいとした、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを示す概念図である。そして、この図中の学習指導システムにおける地理的事象およびその社会的意義そして地理的見方・考え方および地理的判断力に、前述した活用手順を踏まえた世界イメージ形成のための方策が関係することになる。つまり、この図式に従って学習指導システムの全体像をみながら、第19表の世界イメージ形成のための方策を踏まえた、学習指導システムの活用手順を追ってみることができる。

## 第19表　学習指導システムの活用と世界イメージ形成のための方策との対応

| 地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムの活用手順 | 世界イメージ形成のための方策（○番号はその留意点） |
|---|---|
| ＜1＞学習目標を念頭におき、その学習内容を構成するために、地理的事象を教科書や一般資料などから広く素材として収集・選定する。 | ④:「地理的事象の事実性・平等性」<br>⑤:「事例地域の計画的な取り上げ」 |
| ＜2＞選定された地理的事象を、地理的見方・考え方のキー概念、地理的技能の内容から、その主な対象となる内容を分析する。それによって得られた地理的事象は、地理的見方・考え方の構造、地理的技能の探究過程などから特徴づけられることになるが、授業者が意図する任意の学問的、教育的視点をもって精選し、学習内容の構造化を図る。同時に地理的見方・考え方、地理的技能の内容構成も検討し、そのための学習アプローチを選定する。 | ①:「欠落しやすい国々への関係づけと取り上げ」<br>②:「象徴要素による情意的側面への影響」<br>③:「世界イメージの中心となる国々の影響」 |
| ＜3＞発問の組織化を図りながら、必要に応じて、問題解決学習、概念探究学習、体験的学習などの特色ある教育方法を組み入れ、学習内容の再構造化を図り、以上から学習目標を設定する。それを基に学習指導計画案を設計し授業実践を行う。 | |
| ＜4＞その学習成果となる児童・生徒の地理的認識を踏まえ、授業者が目指す「公民・市民」育成のための任意の視点や方法論をもって、地理的事象のもつ社会的意義を捉え、地理的判断力と地理的見方・考え方のキー概念、地理的技能の内容から、その主な対象となる内容を分析する。それによって得られた地理的事象を、任意の教育的、学問的視点をもって精選し学習内容の構造化を図る。同時に、地理的判断力、地理的見方・考え方、地理的技能などの内容構成も検討し、そのための学習アプローチを選定する。 | ①:「欠落しやすい国々への関係づけと取り上げ」<br>②:「象徴要素による情意的側面への影響」<br>③:「世界イメージの中心となる国々の影響」 |
| ＜5＞必要に応じて特色ある教育方法を用いて、学習内容の再構造化を図り、以上から学習目標を設定する。それを基に学習指導計画案を設計し授業実践を行う。 | |
| ＜6＞学習後の児童・生徒の地理的認識は、次の学習指導や実生活に活かせるようにし、また、児童・生徒の日常生活全般の経験的成果となる地理的イメージに、その地理的認識がどのように位置づいたか気づかせるようにする。 | |




第9図　学習指導システムと世界イメージ形成のための方策との対応

つまり、世界イメージ形成のための方策は、学習指導システムにおける地理的事象の収集、選定、精選、学習内容の構造化に関わるものとなる。また、学習指導システムにおける地理的事象およびその社会的意義に対して、本研究で求めたような世界イメージ形成のための方策とは異なる留意点を用いて、この学習指導システムから授業設計を図ってゆくことも可能となるであろう。したがって、本研究の学習指導システムは、多様な授業づくりに応じてユニット化し、応用化できるものである。

以上をもって、第19表と第9図のように、本研究の結論となる、世界イメージ形成のための方策に留意した、地理的見方・考え方、地理的技能を育成するための社会科地理授業のための学習システムおよびその活用について提示するに至った。

今後の研究課題は、世界イメージ形成のための方策に留意しながら、開発した学習指導システムに基づいた、各学校段階(小学校、中学校、高等学校)と、多様で幅のある実際の学校現場に向けた授業づくりを行うこと、そして、その学習指導システムの有効性を、さらに多くの実践を通して、部分的なりにも実証してゆくことである。その中で、様々な学習内容に向けて、本研究の学習指導システムを改善し応用しながら、あるいは問題解決学習、体験学習、調べ学習、概念探究学習などの多様な学習方法に適応させながら、その結果となる学習成果(地理的認識、地理的判断力、そして地理的イメージ)の深まり方について検討し、さらに事例学習の在り方に関する研究へと深めてゆきたい。

最後に、2001年も終わりに近づく頃、アメリカでのテロ事件やアフガニスタンでの戦争が起こってしまった。これらの出来事は、世界平和を破壊に導く国際社会の重大な事件である。願わくは、生徒に、このような社会問題を積極的に解決してゆけるだけの意欲や能力、そして、そのために必要な基礎・基本となる地理的認識、そして世界イメージを身につけさせたい。筆者は、本研究が、それにわずかながらも貢献できるものであると切望し、今後の研究に励んでゆきたい。

## 付記

本研究は、以下の表にあげる学会の研究大会にて発表した内容に、分析・考察を加え、大幅な修正を行ったものである。

| 学会発表の題目 | 発表年月 | 発表学会(会場) | 本研究との主な対応 |
|---|---|---|---|
| 地理的認識に関する基礎的研究ー高校生の世界認識を中心としてー | 1995.10 | 日本社会科教育学会(新潟大学) | 第4章 |
| 高校生の地理的世界認識の内部構造に関する基礎的研究 | 1996.3 | 日本地理学会(慶応大学) | 第4章 |
| ライフ・ヒストリーからみる世界的地域イメージの形成 | 1996.9 | 日本社会科教育学会(茨城大学) | 第5章 |
| 高校生の世界的地域イメージに関する記述分析 | 1996.12 | 上越教育大学社会科教育学会(上越教育大学) | 第4章<br>第5章 |
| イメージからみる地理的意識と地理的見方・考え方 | 1999.3 | 日本地理学会(専修大学) | 第2章 |
| 地理的見方・考え方の実践的運用モデルの設計 | 1999.10 | 日本社会科教育学会(横浜国立大学) | 第2章 |
| 地理的見方・考え方に基づく学習内容の構造化 | 2000.10 | 日本社会科教育学会(筑波大学) | 第2章 |
| 地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の設計ー地理的技能の育成を重視した「野外調査」の授業づくりを通してー | 2001.9 | 日本社会科教育学会(上越教育大学) | 第3章 |
| 社会科地理授業における地理的見方・考え方や地理的技能に関する学習指導の理論づくり | 2001.10 | 全国社会科教育学会(広島大学) | 第3章 |

また、本研究の第2章と第4章の部分は、次の2つの全国学会誌に掲載された(掲載予定)論文をもとにしている。

第2章:吉田剛「地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の改善ー単元『アメリカ五大湖南岸工業地域』」の場合ー」『社会科研究』第54号, 2001, pp.31-40.

第4章:吉田剛「高校生の大陸・国家に対するイメージ分析ー認知的・情意的側面と象徴要素からー」『新地理』vol.49(4), 2002(3月25日発行予定).

加えて、本研究の第3章の参考文献・資料として次の2つをあげておきたい。

参考文献：井田仁康・藤崎顕孝・吉田剛「初等教員養成学部における身近な地域の野外調査に関する指導－上越教育大学の場合－」『新地理』vol.40(2), 1992, pp.36-48.

参考資料：日本社会科教育学会第51回全国研究大会報告, 課題研究Ⅲ, 課題研究報告者：吉田剛他「見方・考え方を養う社会科教育とは」『社会科教育研究』No.86, 2001, p.54.

なお、本研究とは直接的な関わりをもたないが、本博士課程在学中の研究成果の一部には、地理的イメージ、地理的見方・考え方、地理的技能、学習指導システムに関係する次の学会発表や論文がある。

吉田剛「『地理嫌い』と暗記中心である『地理』学習との関係と課題及びその方策に関する基礎的研究」新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会『地理歴史・公民研究』第 32 集, 1994, pp.27-36.

吉田剛「地理学習のシステム化への構想（Ⅰ）－家庭学習への配慮とそのための授業展開への試論－』新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会『地理歴史・公民研究』第 33 集, 1995, pp.29-39.

吉田剛「北陸豪雪地帯における地理的イメージの形成」日本地理教育学会発表（愛知教育大学), 1999.8.『新地理』第 47 巻・第 2 号（1999 年度研究発表大会記録).

吉田剛「公立中高一貫教育における高校地理授業の実践的研究－ティーム・ティーチングによるグループ学習の事例－」新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会『地理歴史・公民研究』第 38 集, 2000, pp.37-47.

吉田剛「公立中高一貫教育における社会科関連の実践－平成12年度新潟県津南町地区の場合－」新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会『地理歴史・公民研究』第 39 集, 2001, pp.41-46.

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、赤羽孝之先生（上越教育大）、岩田一彦先生（兵庫教育大）、二谷貞夫先生（上越教育大）をはじめ、中村哲先生（兵庫教育大）、大嶽幸彦先生（上越教育大）より懇切丁寧な御指導を賜りました。また、中山修一先生（広島大）より資料提供をいただき、そのほか、多くの方々から暖かい励ましをいただきました。加えて、小生の家族（奈美、航）には、多大なご協力を得ました。以上の皆様方に感謝申し上げます。